

<退官記念論考>

時空を超えて人生を享受する夫婦の恩愛物語

—清の沈復の佐使¹ 琉球・思い及びその晩年へ—

劉 剛

A story of a couple's beneficent love that transcends time and space to enjoy life--The Ryukyus, their thoughts, and their influence on the later years of their lives.

Gang Liu

要旨:

沈復は王国時代に琉球・沖縄にやってきた数少ない文人であり、世界で最も有名な人物(来琉人)であろう²。しかし、その生涯は、中国で最も無名で平凡な人物の一人でもあった。だが、生前と死後の夫婦の愛情を描いた唯一の作品『浮生六記』は愛され、求められ、口コミや抜粋、印刷で出版・翻訳され、国境を越えて今日まで影響を及ぼしているのである。

沈復が歴史に残したのは『浮生六記』だけだが、琉球での旅行体験がなければ、『浮生六記』は別の話になっていただろう。不思議なことに、原稿や抄本はすべて発見されることなく、「雪泥鴻爪」(雲泥)³のように姿を消してしまった。偶然の発見により、最後の2巻は再び失われ、巻のタイトルだけが残り、最初の4記のみの内容が残されている。

1 佐使とは、佐(君・臣の補佐役)・使(君臣・佐の調和役)、二つの意味で①互いに助け合うこと。つまり、冊封使の補佐役として同行すること。②漢方で、主薬種である君薬(くんやく)に対し、補助的に配合する薬種をいうこと。

2 劉 剛:清代における冊封琉球の散逸史料:『琉球国記略』(『海国記』か)——沈復『浮生六記』第五記「中山記歴」の元抄本か(日本語訳付け)——沖縄大学人文学部紀要 第25号(2022年3月発行)拙文参照。

後二記の偽作についてここで少し補充させたいが、鄭逸梅氏の話によると、ある有名な老作家が蘇州で後二冊を発見したという。その後二記は、ある農地を通りかかった際、一人の農民が読んでいるのを見たという。彼は驚いた由、1ヵ月間借りて全部読み終った頃、やはり沈三白が書いたものだと確信したと言った。そこで、彼は上海に戻り、世界書局と出版契約を結んだ。呉地に戻ると、農夫はすでに本を持って引越してしまっていて、どこにもいなかった。老作家は心配して焦っていたが、そこで、彼は彼の師匠だった鄭逸梅に相談した。沈復の書き方によく似ているので、彼の記憶の復述するもど、師匠ができれば「後二記」を再現する執筆することを提案した。先生はあえてお受けにならず、丁重にお断りした。その後、世界書局から『浮生六記』が出版されたくわしい経緯については、二つの記録が再び獲得できたか、または、別の人が偽造したのかは不明である。(原文は1947年5月7日の新聞「申報」に掲載された「浮生六記」について、作者:鮑仲基、張一民のsinaブログ「浮光掠影」の転述を引用)

3 雪が溶けた後の、泥の中にできた^{ひしくい}鴻の足跡という意味から、転じて、跡形もなく消えてしまうこと。とくに、人の行きや世間の出来事などが、後になって訪ねてもわからなくなっていることをたとえていう。「せつでのこうそう」とも読む。(『四字熟語辞典』より)

琉球・沖縄は、この名作と切っても切れない関係にあり、二十数カ国語にも翻訳されて世界中に広まっている。つまり、著者にとって琉球体験、最後の二つの巻に表れた琉球への観察と考察、そして自らの人生への見直し、反省、啓発は、言い換えれば深いつながりであると固く信じているのである。⁴

沈復の多難な人生の中で、最大の報酬と支えは、「ソウルメイト（靈魂伴侶）」である妻芸娘⁵との「夫婦恩愛」と「人生と夢」の織り成しと発展であり、それが主人公の人生と達観的な⁶精神性への巧みな対応とくつろぎを支えているのである。

琉球への旅は、沈復の琉球・沖縄と『浮生六記』の価値と宿命的なつながりを示している。また、琉球時代にどのような生活感覚や愛着心を身につけたのか、中国の伝統的な美意識から離れた文体を示す彼の作品が、なぜ今日も世界中で少なからず流通し、読まれているのかが気になるところだ。彼の作品は、中国の伝統的な美的関心に完全に対応していないにもかかわらず、なぜ今日でも世界中で流通し、読まれているのだろうか。

この論考では、これらの問いを探っていく。『浮生六記』著者自身の琉球への旅は、人生、感情、精神の旅と複雑に絡み合い、結びついた、複雑で崇高なものだったと考えても、決して大げさではないだろう。

4 前稿で、銭泳の『記事珠』に見える『(冊封)琉球国記略』などを翻訳紹介の上、同時代史料と認識する上、「中山記歴」(「海国記」)とイコール史料ではない、と筆者は認識している。つまり、沈復の観察力や細かく記録の能力で原文の「中山記歴」のなか、如何に琉球の社会面や人間生活および価値観を感知したのか、そして自分が丹念に描いた唯一に生き残った作品に取めたのは、何故か、と筆者は吟味しながら推察して探りたい。

5 沈復の妻である陳芸娘という名前だが、ただ芸という字は、中国語では此処のユンというふうな発音であるが、日本語の芸(ゲイ)という発音ではなく、芸娘とは愛称なので、親しみを込めた名前である。

6 達観とは、人の物見が、全体を広く見渡すこと；ものの真理や道理を極めること；最悪の事態の想定や安易な希望・期待の排除、諦念などを通して、何が起きても動じない心境に達することを指す意味。

目次

はじめに

一 沈復の人物像およびその人生

1. 清貧人家の婚姻恩愛の幸せ（巻一 閨房記楽（結婚の幸福）
2. 日常茶飯事外の生活にある楽しみ（巻二 閑情記趣（情趣ある生活）
3. 暮らしをめぐる頓挫があっても平常心（巻三 坎坷記愁（不遇に泣く）
4. 視野を広げれば別天地（巻四 浪遊記快（旅の楽しみ）

二 佐使琉球旅の端末 浮生四記から六記へと

1. 琉球旅の情報に関する詩作
第五記中山記歴の散逸の替わりに
2. 人生観を映すこと及び恩愛の理念
第六記養生記道の繋がり
3. 愛の恒久 妻への眺め

三 曲散人婦 後二記の散逸と鄧尉梅の所在

1. 恩愛縁分の始終
2. 沈復の隠遁帰着 鄧尉梅とは桃源郷か
後書き

キーワード：佐使琉球・若夢浮生・恩愛縁分・閑情逸趣・留痕および隠遁

正文

はじめに

沈復は王朝時代に琉球・沖縄に渡った数少ない文学者の一人であり、文学作品を残した一人である。また、後に琉球に来た外国人の中で、最も有名な人物の一人であろう。

誰もが幸せになりたいと願っているが、どうすればそこにたどり着けるのだろうか。

沈復は、自分の人生を『浮生六記』という本に記録し、後世の人々に、自分の人生や生き方の意味、愛の本当の意味、そして愛ある夫婦としての生き方を考察させることができた。

生前の彼は、江南のある小都市に住む、あまり知られていない地味な文人であった。後年、『浮生六記』で一躍有名になり、国内外に名を馳せることになるとは、誰も想像していなかっただろう。琉球への旅がなければ、『浮生六記』は今の形とは別の物語になっていたと著者は考えている。今日、古今東西、中国や日本であれ海外であれ、その制作の動機や価値は何であったのかが問われている。

今と違って、古代の中国では、竹簡や紙に筆で書いていたし、執筆費、活字代なども非常に高価で、当時の作家は、宣伝やギャラ、印税などのために記事や本を書いていただけでもないし、プロモーションのために書いていただけでもない。昔は、本当に言いたいこと、後世に残したいことだけを、無意味な言葉を積み重ねずに、「字字珠璣（一字一句も重宝のよう大切に）」とい

う言葉があるように、書いていた。それは『浮生六記』も同様で、だからこそ文学史に残り、いまだに新鮮さを保ち続けることができるのだらう。

著者は、この本の冒頭で次のように書いていた。

「私は乾隆二十八年（1763）癸未の冬十一月二十二日に生まれた。時はあたかも太平の御代、且つ士大夫の家に生まれ、蘇洲の滄浪亭⁷の畔に生まれたのだから、天の私に対する厚意は至れりと謂うべきであろう。宋の蘇東波は「事は春夢の如く了って痕無し」⁸と言っているけれども、もしかこれを筆墨に記さずにすましたのでは、かの蒼天のせつかく厚意を無にしたことにはしなないだろうか。」

そして着手は、「そこで「関雎」をば『詩経』⁹三百篇の冒頭に冠しあることを思い、夫婦の事をまず首巻に列して、あとは順々に述べることにしたのである。」（巻一、一）

本書の日本語版では、翻訳者は最初の四つの巻のみを掲載し、以下の順序で展開している。

1. 巻一 閨房記楽、結婚の幸福、2. 巻二 閑情記趣、情趣ある生活、3. 巻三 坎坷記愁、不遇に泣く、4. 巻四 浪游記快、旅の楽しみ。

つまり、清貧人家の婚姻恩愛の幸せ、日常茶飯事外の情趣ある楽しみ、暮らしをめぐる頓挫があっても平常心を持つこと、視野を広げれば別天地になる。

まとめていえば、人間生活は幸せや楽しみがあり、途中に不遇や頓挫などがあっても、開放的に快適な努力をすること、例えば旅などで解消していける。

残存の前四記のなか、筆者は、人の生涯は、誰にでも春の夢のような場合もあるが、それこそを大事にしないといけないと説いている。つまり、人間にとって、「人生は夢のように短く儚（はかな）いものだから、できるだけ面白く、人生を満喫しよう（夢を生きよう、面白くならう）（浮生若夢、有趣做人）」、そんな美しい瞬間を記録し、裏切ったり失敗したりせず、また「神の優しさと善意」を無駄にせず、「愛に満ちた痕跡を残す」というべきなのだ、と。例えば、妻との愛着や愛情、旅行すれば喜びがあり、琉球への旅などを、後世にも伝え、共有するためのものである。

『浮生六記』の誕生は、もちろん琉球列島、沖縄と結びついている。後二記は完成後、まもなく不可解な理由により失われてしまったが、著者沈復の琉球旅行がなければ、いわゆる現在の六記の形はあり得なかつただらう。

本稿では、『浮生六記』の主人公たちが示した彼らの夫婦恩愛の実態と内面を、彼らが生きた社会の伝統的な「人生観」「倫理観」等との拮抗の中で再評価し、新しい生き方の始まりと価値観のありかたを後世に開く、あるいは示すことを目的として、現存する最初の四記と散逸した後の二記を本質的に結びつけようとするものである。さらに、『浮生六記』が国際社会で途切れる

7 滄浪亭は、蘇州城南の三元坊にある名園、もと呉越のとき（907-926）広陵王元璋の花園。宋の慶曆四年（1044）、詩人の蘇子美、その中に滄浪亭を建てた。南宋の時は名将韓世忠の住宅であった。今日なお古樸幽静。国語辞典、漢和辞典より。

8 「事は春夢の如く了って痕無し」——蘇の「潘・郭二生と伴に郊に出でて春を尋ね」の詩中の句。

9 『詩経』は、中国の場合、日本文学史上の『万葉集』に相当する地位。「関雎」——『詩経』三百篇の冒頭の一首。「関関たる雎鳩は、河の洲に在り。窈窕たる淑女は、君子の好逑」の句に始まる。君子が淑女を求め、琴瑟相合することを歌ったもの。

ことなく流通し、翻訳・再版されている理由が、それに応じて明らかにされるだろう。(なぜ国際社会で生き残り、翻訳されたのか、その理由を適宜明らかにすることを目的としている。)

一、沈復の人物像およびその浮生

1 「恩愛」¹⁰ある婚姻であれば、清貧な人生も幸せ (巻一 閨房記楽(結婚の幸福))

沈復の「浮生六記」についての公的な考察は、ここでは省略するが、筆者の前論考¹¹を参照されたい。今回の論考では、主に沈復の琉球への旅が、彼の人生観やその他の精神的な側面に与えた影響について論じたい。

清嘉慶十三年(1808年)を契機として、その後、序文で紹介したように、沈復は唯一の著作である最初の四記を完成させたようである。この手記は忘れられない記念のものとして書いたようだ。これは、昇任や印税や原稿料を稼ぐために執筆することが多い現代の文化人や大学教員の動機とは大きく異なっている。その代わり、妻を愛する者として、妻との愛の交歓生活の暖かい思い出をひたすらに綴っている。妻との愛情あふれる生活の中で、温かい交流を綴っている。どんなに不満や不幸があっても、妻の愛と二人の興味深い人生を綴った彼の、並々ならぬ寛容な思考、「怨親平等」¹²のような愛に満ちた記録を残しているのだ。

最初の四つの手書きは下書きされているが、五番目と六番目はまだ現れず、まったく別の話に

10 恩愛と縁分という言葉は、東側特に東アジア社会にある特殊な男女の情愛、とくに夫婦愛を表現する言葉である。英語をはじめ西側つまりギリシア伝統由来の社会では、そのような言葉で愛は、主観的なもので、契約によって結び付ける。ただの契約のように、性と情感的な表現する言葉があるが、西側の契約的な婚姻家庭観と相対化して、恩愛の場合、特に情感的な部分が重んじて強調する。かえって、東の場合、愛というものは、縁分に基づく愛情は、その因縁が現世のみではなく、前世と来世にもつなげようとして、特に恩愛という主観的と客観的の性格を一体化して一つ言葉になるがあるので、感情的なつながりや絆で結ばれている。極端な表現すれば、民間人の日常では、愛と憎しみの相殺もあり、つまり、日本語にも愛憎という用語があり、西側でもアンビバレンスすなわち「両価感情」や「両面価値」、「両価性」の用語もあり、ある対象に相反する感情を同時に持ったり愛情と憎悪を同時に持つこと「愛憎こもごも」「愛憎半ば」をもったりことという。いずれに、片方の強調で、自分と相手との感情的気分が統一や合致してないままで、精神的病気になることや離れてしまうことになる。恩愛定着の意味とは違うことである。その恩愛の縁分は五百年前より由来の縁分だよ、とよく表す。

11 劉 劉:清代における冊封琉球の散逸史料:『琉球国記略』(『海国記』か)——沈復『浮生六記』第五記「中山記歴」の元抄本か(日本語訳付け) 沖縄大学人文学部紀要 第25号(2022年3月発行)参照。

12 一般に中国伝統文化のなか、そのようなニュアンスある言葉は内装で、語源は仏教由来で、『禅学大辞典』には、怨憎する人々に対しても、親愛する人々に対しても、差別することなく、慈悲愛護の念をもって接すること。仏様の眼から見ればどちらも平等にいつくしみ憐れむべきであるという。対立や争いの絶えない現実を目の前にする時、絶望的と思われるかもしれないが、最終的に目指すべき到達点は怨親平等であると仏教はいうのである。日本文化の中に根強く存在することで、敵も味方も同じように処遇すること。恨み敵対した者も親しい人も同じように扱うこと。

要するに、敵味方の恩讐を越えて、区別なく同じように極楽往生させること。同じサピエンス種の人間同士の間、「怨親」は自分を害する者と、自分に味方してくれる者の意にも怨念のあるもの対しても釈然としておく。沈復夫妻は、そのようなセンスを持つ人として珍しくなる。怨親平等の精神を具現化した一例として、鎌倉に円覚寺という臨済宗のご本山がございます。円覚寺は弘安5年(1282)に鎌倉幕府の

なっているようだ。

このことは、第四記にある年月日ですべて明らかになる。前出の議論でも少し触れたが、まだ改訂が必要なこれらを琉球に持ち入り、同時に改訂などの変更を加えたと思われる。それは、琉球滞在中に滞在した天地館¹³の一室を、彼が「留痕室」¹⁴(ルーメンルーム)と命名したことからもうかがい知ることができる。当時、沈復は46歳くらいだったと推定される。

現代社会では、人の生き方や暮らし方は、常に何らかの外的要因によって決定され、影響を受けている。人は線路の上しか走れないので、人生も恋愛も仕事も、自律的に選択することは難しいだろう。これは、社会主義国でも資本主義国でも(計画経済でも市場経済でも)、物質的にも精神的にも、誰もが特定の生き方や時代の枠を超えることができず、それでも社会の適合的な生き方に従わざるを得ないということである。

しかし、精神的な面では、人は常に何らかの超越を目指し、この現実の束縛から逃れたいと願っている。それは、自由と愛に満ちた生活を目指すホモ・サピエンス共同体の特異な人間性ではあるまいかと思われる。

このことは、特定の時代や社会、宗教を超えた普遍的な人生観が確立されており、人間は通常、無意識や潜在意識の影響を受けて、その実現を追求したり、目指したりしていることを示唆しているのではないだろうか。

しかし、もし存在するとしたら、どのような形で現れ、実践しているのだろうか。結局のところ、愛情や夫婦愛に満ちた人間の物質的・精神的・生活の理想的な状態、言い換えれば人間の本性一般が、空間的・時間的状況や社会力学(例えば、資本の固持や資本のパラノイアなど)の状態の制約に直面して存在したり実現したりできるかということ、それはまやかしの夢のように思えるのだ。

王韜おうとうが言うように、この本は六つの巻からなり、主人公とその妻の幸せと喜び、悔しさと苦しみ、喜び、悲しみ、恐怖、そして「しかしそれはすべて儂はかなく、突然すべてが夢のように思える」という人間模様が描かれています。これが『六記』を書いた理由である。(『浮生六記』跋、同上)。つまり、人生が有形か無形か、欲求が物質的か精神的か、求めるものが夫婦の愛と安らぎか、そ

執権であった北条時宗が、中国・宋より招いた無学祖元禪師によって開山されました。国家鎮護や禪の教えを広めるだけでなく、蒙古襲来によって亡くなった人々を、敵味方の区別なく平等に弔うために建立されたお寺です。

戦争という不幸な出来事によって亡くなった人々に、もともと敵味方の区別はありません。立場の相異はあるにしても、一つしかない命を失ったことに違いはないのです。私たちは敵味方というお互いを分ける立場にばかり執着をしていると大切なものを見失ってしまいかねません。この「分ける」ということに関して鈴木大拙は次のような指摘をしています。

分けると、分けられたもの間に争いの起こるのは当然だ。すなわち、力の世界がそこから開けてくる。力とは勝負である。制するか制せられるかの、二元的世界である。高い山が自分の面前に突っ立っている、そうすると、その山に登りたいとの気が動く。いろいろと工夫して、その絶頂をきわめる。そうすると、山を征服したという。[中略]この征服欲が力、すなわち各種のインベリアリズム(侵略主義)の実現となる。(『新編 東洋的な見方』岩波文庫)

13 天使館の居場所は、現在跡地になっているが、具体的な場所は、那覇西消防署のすぐ隣にあるらしい。

14 彼は、自分の天使館に置かれた個室を「留痕室」を名付けて、人生や暮らしの痕跡を残するという意味ほかならぬ。

のいずれであっても、「魂のカップル」としての両者の心の交流に頼らなければ到達できない、という問題が、人生模様の客観的記述と主人公二人の心の調和を通して、列挙され把握されることこそ、最高の境地に届くものである。

結論があるとすれば、人生は夢のようなものだから、おもしろがって楽しもうということだ（夢を生きるなら、おもしろがってみよう）。愛と運命の絆で結ばれた夫婦の情感は、伝統的な中国文化に蓄積された人間性を束縛する巨大な暗幕に、東の「人性の光」を投げかけた。それゆえに人々に希望を与えているのである。

しかし、『浮生六記』の沈復夫妻の短い結婚生活は、静かな宇宙の中の一瞬の光のように、人々の孤独で退屈な心に絶えず紗をかけ続けているのである。だからこそ、『浮生六記』の文学的生命力は、時を経てもなお広がり、愛読され、不滅の価値と光を放ち続けているのだらう。

ここでは、まず沈復の人物像について概観する。彼は、世のなかに輩出した作品数の少なさで、中国文学史上にも当初はあまり知られなかった人物である。通常の意味での「清寒孤高」な文人ではなく、ずる賢い商人でもなかった。不規則な生活のなか、様々な誤解や抑圧、軽視やいじめなどに、復讐などの言動もなく、変わらず世の中に思いやりの心やシンパシー・エンパシー¹⁵、世の中や男女を思いやり、人を許し、寛容な心を持つ、優しい男であり続けている。おだやかで、素直で温良な人物、ただの平凡な町住民の一人（もちろん文学者の肩書きを持つ）である。

古代中国の煩わしい封建的な家族の絆に縛られながらも、片時も忘れられない亡き妻との思い出を縦糸と横糸に織り込み、その人生が世界で最も美しかった夫婦の純愛への賛辞と、風景と詩を愛する画家の気質とが見事に調和している。この自伝的小説は、時代や社会を超え、読者の心に永続的かつ痛切に触れるものであり、当時の社会では極めて珍しい文学活動であった。

沈復が生きていた時代は、清の末期であり、中国封建時代の延命時代とも言われる。だが、彼の生れた年代と場所は、結構なところだと思う。生まれ年代とは、乾隆の時期で、清の最盛期である三代（康熙、雍正、乾隆）といい、とても国運のいい時期だったが、場所も優れている。諺で言えば、「上は天国あり、下も蘇州杭州ある（上有天堂、下有蘇杭）」、今までもそうである。

この時代の特徴は、すでに沈復夫妻 30 才代頃の乾隆五十六年前後、世の中に出回っている曹雪芹の『紅樓夢』（別名『石頭記』）のなかに、よく描かれているように、士大夫の家庭・家族で、繁栄から没落していくプロセスのなか、人情の冷暖・零落などの経験から、得られた些細を筆の先に注いで描いた。極めて富貴繁華な貴族生活を経験したが最後に非常に貧乏な日々を過ごした。つまり、乾隆帝の時期、18 世紀後期、江南地域の商業とくに塩業の衰退も事実になり、塩業商人の生計もともに衰退していく。このような事情で沈復の生計を立てられる幕僚生活もすでに『六記』の記述で断続的に下落していくように表すわけである。

しかし、中国社会の政治支配は「農業の重視と商業の抑制」を強調していたが、清朝末期の江南社会はすでに「初期工業化」の段階に入り、南宋時代（11 世紀）以降、市場経済の胎動がかなり発達していた。前述したように、初期商人の資本と生産との間には、資本の生産様式に左右されない純粋な外的関係しかなかったのである。商人はギルドや農民から商品を譲り受け、価

15 シンパシーは「同情、共感」という意味である。一方エンパシーは「共感、感情移入」という意味である。（『広辞苑 第七版』岩波書店）より。

格差を稼いでいた。¹⁶

また、沈復の晩年(1825年以降)は、アヘン戦争が始まり、植民地支配の時代になる十数年前だったことも興味深い。つまり、彼らは伝統的な中国と近代的な植民地主義の出現の狭間で、古い中国から切り離されただけでなく、近代の半植民地支配に手つかずのまま生きていたのである。また、彼らの結婚生活は、家父長制から個人の解放と独立を目指す、特にデリケートな時期であった。

植民地主義の政治的・経済的・文化的なパノラマと影響が始まったのは、もう少し後のことであることにも注目すべきだろう。この時代は、1762年にジャン・ジャック・ルソーが「西洋で発表した最初の完全な教育哲学であり、最初の教育小説」である『エミール』が出版されてから半世紀余りの時期でもある。これは少年エミールの成長体験を通して古典的教育理論を説いた古典的な作品であり、民主主義社会に責任を持つ自立した人間になるにはどうしたらいいかという、人間性についての理論でもある。これからの社会をリードする人材をどのように育成していけばいいか。その後、1884年にエンゲルスは晩年の代表作である『家族の起源、私有財産と国家』を発表した。特に、人間の個性の解放、自立的な精神を求めた¹⁷。

これらはすべて、当時の中国と外国の交流の中で、複雑で奇妙ともいえる人文的な背景や素晴らしい人間像の形成につながっているのではないのか、と筆者は考えている。

沈復の商売経歴にもそれらの事情が伺える。同時代的に市民社会の文化が江南地域の蘇州などの地方では活発になっている。その背景は、世界の動き特にアジア東部が海の時代にはいったこと、ヨーロッパ勢力のアジア進出は、さらにその相乗効果的な影響を中国東南沿岸部に及ぼしている。

清の中期、蘇州は全国でも経済文化が一番発達してきた都市である。康熙帝の頃、「東南財賦、姑蘇最重；東南水利，姑蘇最要；東南人士，姑蘇最盛。（東南の府税は、姑蘇一番；東南の水利は、姑蘇が要；東南の人は、姑蘇が最も集める）」（沈寓より）

または蘇州は「山海所産之珍奇、外国所通之貨貝、四方往来、千万里之商賈、駢肩輻輳（山海産の珍味奇物、外国流通する貨幣、四方往来、千万里の行商坐賈（音 gu、店あり商人）人の平行肩や車輪の混雑）」；「四聚」¹⁸のなか、蘇州が一番。

「吳閶至楓橋，列市二十里（吳地から楓橋まで、市場の店沿いは二十里まで伸ばせ）」「四方万里，海外異域珍奇怪偉，希世難得之寶，罔不畢集，誠宇宙間一大都會也（四方万里、海外異域の珍奇怪物、世の中に見難いもの、皆揃え、まさに宇宙間の一番多い都会でもあるだろう）」。

このような繁栄的な面貌は、徐揚により『盛世滋生図（俗名：姑蘇繁華図）』によって残されている。¹⁹「蘇州為東南一大都會，商賈輻輳，百貨駢闐。上自帝京，遠連交廣，以及海外諸洋，

16 『資本論』、第3巻、388～396ページ。Karl Marx, Vol. 1, p. 739 は、「資本主義の時代は16世紀に始まった」と主張しているが、「早くも14世紀か15世紀に、時として特定の地中海の都市では、資本主義の初期段階がすでに存在していた。資本主義的生産のプロトタイプ」。

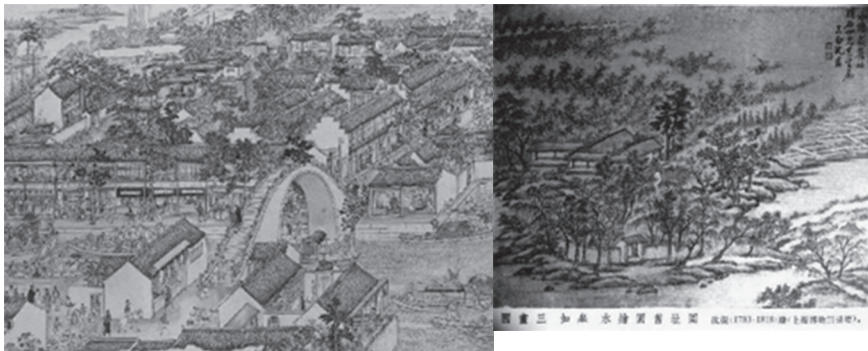
17 1908年に堺利彦が『男女関係の進化』として翻訳を発表した。ただし、弾圧を回避するために国家論部分などは翻訳されなかった。現在、『家族・私有財産・国家の起源』として、岩波文庫（1979年；戸原四郎訳）、新日本出版社（1999年；土屋保男訳）などから出版されている。

18 劉獻廷『広陽雜記』卷四謂：「天下有四聚，北則京師，南則佛山，東則蘇州，西則漢口。」中華書局標点本、1985年第2次印刷。

梯航畢至。(蘇州は東南地域の一大都会で、行商坐買揃え、上から都より、遠くつながり広く散在、海外諸国までへのはしご届く)。

嘉慶帝の頃、「繁而不華漢川口、華而不繁廣陵阜、人間都会最繁華、除是京師吳下有。(繁盛しているが華やかではない漢川口、絢爛豪華ではない、広陵福。世界は最も繁榮し、首都の以外ただ呉夏がある)」。獵微居士より、「士之事賢友仁者必於蘇、商賈之糴賤販貴者必於蘇、百工雜技之流其售奇鬻異者必於蘇(士の人材も蘇州に集め、商売も安く仕入れ高く稼ぎも蘇州にでき、百工雜技者も技能の展示や売り出しも蘇州に出る)」。孟氏という人がよく蘇州に行ったことがあり、蘇州の繁華ほど、彼によると、「无一日不然、无一时不然、晴亦然、雨亦然(市場には隆昌繁榮ない日もなく、ない時もなく、晴れても、雨でもそうである。)」²⁰

市場競争の激しさは、「大率吳民不置田畝、而居貨招商……競侈相高而角利錙銖、不償所費。(だいたい呉の民は田畝も土地を買わず、ただ品物ばかり備蓄し、卸売を入れて……なるべく高く売り且つ小さい利益を図れる)。(崇禎『吳県志・王心一序。』より)と、伝統的農業社会から商業社会に脱皮する最中のことである。



(左：『盛世滋生图(俗名：姑蘇繁華図)』(部分) 右：沈復『水繪園図』、上海博物館蔵品)

本文の主人公である沈復の職業とかかわっている図書字画などの文化産業から見ても、十件の店舗があり、法帖、筆庄、湖筆、紙張発客、考試試卷、状元考俱、三場名筆など、大雅堂書坊では古今書籍、書坊(二階立て、二つの店舗)、名人字画(重复者2家)、装潢などなんでもそろっている。文化産業と市場の活躍は明らかである。乾隆時代では、「凡海内得宋、元、明人書畫者、必使蘇工装潢。高手秦長年、徐名揚、張子元、戴彙昌等皆名噪一時(国内外、宋、元、明の時代の絵や書道作品を頂いたら、必ず蘇州の総表紙師に頼むし、上手な師父は、秦長年、徐名揚、張子元、戴彙昌など一時有名)」、だから錢泳の話によると、「装潢以本朝為第一、各省之中蘇工為第一(装幀は本朝が一番、各省からすると、蘇州の匠人は一番)」²¹。

19 范金民：「清代蘇州城市文化繁榮の写照——『姑蘇繁華図』」(出所：『史林』2003年第5期、『江海学刊』2005年第5期)2018-08-22。この畫は、長さ12.41メートル、幅は、0.39メートル。紙質、彩色。この「姑蘇繁華図」に描かれた乾隆帝二十四年は、乾隆帝二十二年目の2回目の南方巡視の直後頃のことだった。記載されている地域、特に胥門から山塘街までの地域は、当時、蘇州で最も繁榮している商業および文化地域であり、文献で最も記載おおく、地元の人々から最も賞賛され、海外の人から最も懐かしい地域である。

20 その史料は、次の文献を参照：沈寓：《治苏》，《清经世文編》卷二三；刘献延《广阳杂记》卷四谓：「天下有四聚，北则京师，南则佛山，东则苏州，西则汉口。」中华书局标点本1985年第2次印刷；如刘大观认为，“杭州以湖山胜，苏州以市肆胜，扬州以园亭胜”。文见李斗《扬州画舫录》卷六《城北录》所引；康熙《苏州府志》

都市繁華の裏面、激しい競争の内実がある。競争が激しい人間関係の百態も見えてくるだろう。偽善や詐欺、またはインボリューション・内部ローリング²²などの現象が際限なく出てくる。沈復とは、まさに人格離反的なものだと思われる。

時代に関係なく、安定した健康な生活を通して人間として生まれ、成長し、大人になって仕事やキャリアで成功し、個人的に幸せな恋愛や結婚をすることが人生の成功であるとされているが、そのすべてがそうであるとは限らない。少なくとも宋の時代（960-1279）から科学に浸透していた儒教（宋）思想では、そのような人が生まれながらに持っている感情は、礼儀によって抑制・抑制されるべきものであるが、人が生まれながらに持っている七情（喜・怒・哀・楽・愛・悪・欲）²³は本来の七情、人間の自然の感情であると考えたのだ。沈復は彼らを人間として見ていた。彼は、感情こそが人生を豊かにすると信じていた。

特に、他の歴史伝説・物語における男女の主人公とは異なり、夫婦関係が対等な立場で表現されている。

日本語訳の松枝氏が指摘するように、「作者は、第三巻の古代中国の大家族主義に対して、静かで優雅な方法で抗議しているようだ」。中国では自伝的文学というジャンルはあまり発達していない。このテーマに関する優れた文献はほとんどないようである。その理由の一つは、中国の学者・官僚が、家庭内の瑣末なことに外から言及することを快く思わなかったからである。日常的家庭生活、複雑な人間関係、経済的な問題、そして特に男女の愛については、たとえ正式に結婚していたとしても、一切触れられることはなかった。

儒教的な礼法社会では、それは君子たるものの絶対に口にすべからざることとされていた。そうした中で『浮生六記』の作者が、家庭内のいざこざや、金銭の出し入れについて、とくに夫婦の間のひたむきな愛情について、何の作り飾りもなく、こと細かに描き出したことは、たしかに例外といってよかった。

「その意味で、愛妻家の記憶記と素人画家の煙霞手帳の合冊という形でなったこの小さな書物は、作者自ら期せずして中国に新しい自叙伝文学を創製したばかりでなく、また期せずして近代写実小説の体を得たものといつてよいのではなかろうか。古来の中国文学はとかく表現至上に傾

卷五四《遺事下》；乾隆《吳縣志》卷二三《物産》；苏州历史博物馆等編《明清苏州工商业碑刻集》，江苏人民出版社，1981年，第331頁、《韻鶴軒雜著·戲館賦》；《韻鶴軒雜著》序；王相：《鄉程日記》；道光《苏州府志》卷首之二《巡幸下》；徐揚《盛世滋生圖》跋。圖現藏辽宁省博物館。本文所用圖為辽宁省博物館、中國歷史博物館、蘇州市地方志編纂委員會編，文物出版社1986年出版本。同年，商務印書館台灣分館、香港分館以“清·徐揚《姑蘇繁華圖》”分別再版，本文一并參考、など。

21 錢泳：『履園園叢話』十二「裝潢」より。

22 インボリューションとは、英語でInvolution、中国語で内卷と訳すが、社会学用語で「内側に向かう発展」のことである。現在、過剰的な進めのニュアンスで流行。日本語で退縮という意味で、やりすぎで逆効果になる、つまり成語の「事倍功半」という意味。この言葉の語源が最初にインドネシアのジャワ島の農業生産を論じた文章で、内部資源を活用した発展という前向きな意味だったが、引いては、発展や伸び伸び過ぎて内部暗闘や無駄消耗など発生、戦後からいまで、この言葉はやがて、社会の発展が安定段階に入ってから停滞してしまう状況の喩えにもなった。このような社会現象は、前の時代もあるが、今のグローバル時代の頻度ではないが、使える言葉である。

23 中国語の場合、七情六欲で人間の情緒や欲張りを描く。儒教や仏教の言い方は違うが、一般の生活の中、七情とは、喜、怒、忧、思、悲、恐、惊という七つのことを指す。六つの欲望とは、それらが、眼、耳、鼻、舌、身、意の六種で見欲（視覚）、聴欲（聴覚）、香欲（嗅覚）、味欲（味覚）、触欲（触覚）、意欲（衝動感覚）にそ

いて内容は従となり、いわば文学のための文学の虚飾美に陥る弊害がないでもなかった。ここに一人の芸術的な自然児、文章道の素人が、やむにやまれぬ欲望によって全く逆な試みを行い、芸術主義に対して人間主義ともいべき文学を成したのはまことに面白い現象であった。」(「解説」より)まさに時代の躍動に伴い、人文的・市民的な人間的な言動が中国江南地域にはじめに生まれ変わり、その後、その本の伝文学の形で沢山の人々に愛読されて伝えられたのであった。

人間の一生のなかで、人生観という精神的な価値観は主観的にも客観的にも、所々に表れる。人生観の価値所在は、美のある人生である。物質面の努力や追求のほか、精神面に美のある人生は、最高であり、しかもよく男女関係の方に表れるだろう。

男女関係と言えば、夫婦関係に愛情があることこそは、とても幸せなことである。一人の男性にとって、一生をかけて妻を愛することは理想的なことであり、逆もまた同然であろう。

沈復夫妻の人生観や愛着心は時空を超え、現実的な現代社会においても、稀有な理想の男女・夫婦の関係として評価され、魅了され続けている。

しかし、現代社会の実情は、時代や社会の様々な要因の影響により、世界の紛争の中で夫婦の恋愛関係の実態が「崩壊」することが多く、夫婦間の「愛着障害」の発生や、その始まりと終わりの判定が非常に困難になっている。さらに、途中で愛想を尽かしても離婚しない夫婦もたくさんいる。これは、多大な忍耐力だけでなく、双方の子供への配慮、財産や年齢などの分割、あるいは我慢、調整、妥協、許し、譲り合いなどの試みがなされた結果であると言えるだろう。

沈復夫婦の場合、さらに親子関係に対して、子供に対して無理に理教的な躰もなく、自分の運命は自分で責任を取って成長させていく。これは、あの封建時代においては超然的なことである。やはり、子供男女二人もその社会で不遇のままであった。これについて、現在までも後世の人々に批判されているようである。

沈復は、手記の最初に陳芸という女性との邂逅や情愛を人生の最大な幸せとして扱っている。「そこで「関雎」をば、『詩経』三百篇の冒頭に関してあることを思い、夫婦のことをまず首巻に列して、あとは順々に述べることにしたのである」だから、「私は幼い時に金沙の子家の女と婚約したが、その子は八歳で夭死したので、陳家の女を娶った。陳氏、名は芸、字は淑珍といって、母方の叔父にあたる心余先生しんよの女である。生まれつき頭がよく、言葉を覚えるころ『琵琶行』を口移しに教わって、すぐにそらんずることができたほどであった。」²⁴(巻一より)

つまり、二人は(青梅竹馬)幼馴染の関係で、小さい頃、お互いに抱いた愛慕や理解が後年まで続いたことがわかる。その後の結婚生活は、夫婦愛をずっと保って、「私はあなたを愛しているほど他の誰かを愛したことはありません。ただのあなたのみ」というほどだったのである。数年後、彼は広東省にある蟹民(アマ、水上住民)の遊郭に遊ぶ時、耽美的な場面や景色を見たとき、また妻のことを思い出して、

「縦横に落ち葉のように水に浮かんでいるのは酒船である。きらきらと天につらなる星くずのように輝いているのは酒船のあかりである。更にその間を小艇が織るようにけずるように往来している。笛三味線の音が長潮のわきかえる音にまじって聞こえてくる。われ知らず身も心もとろ

れそれぞれに対応。そして、仏教の場合、すべて情欲で纏まっている。それは、いずれに仏教や漢方などより、人間の本能および感覚の表現する由来し、多少文字の違いやずれがある。

24 訳文などの引用は、すべて佐藤春夫、松枝茂夫の翻訳各版それぞれの「解説」により、下同。岩波文庫『浮生六記』1938年より各刷を参考。

けてしまうかと思う。まさしく

「わかくして廣東に入らず」

とはこれをいったものと合点された。それにしてもわが妻芸娘がここに一緒にいたらと惜まれて、振り返って喜兒を見れば、月影の下にどうやら妻の顔にそっくりなところがあるゆえ、その手をとって、うてなを下り、あかりを消して横になったのであった。」(巻四より)

沈復の人物像や人生観から言えば、確かに後世の人々と比べものにならず、冒頭の紹介したように、彼自身は

「乾隆二十八年癸未冬十一月二十二日に生まれた。時はあたかも太平のお代、且つ士大夫の家に生まれ、蘇州の滄浪亭の畔に生い立ったというのであるから、天の私に対する厚意は至れりというべきであろう」

という天に畏敬の気持ちを持つもので、気の合う妻をくださっていただき、蘇東坡は「事は春夢の如く了わって痕無し」と言っていることこそ、「留痕」の自覚や意識が強くなって、「もしかしてこれを筆墨に帰さずにましたのでは、かの蒼天のせつかくの厚意を無にしたことになりはないだろうか？」(巻一引用)。

亡妻の追想を記憶に残すために、天に畏敬の気持ちを持ちながら、感謝やがっかりさせないことで、「恥ずかしいことに若い時学問する機会を失い、いささかの見識も持ち合わせぬので、アリのままの事実を洗いざらいに書き綴ったのである。文章の法がどうのこうのと詮議だてされても、それは汚れに鏡に明澄さを求めるようなものであろう。」と自覚して書き残している。

さらに、「在来の伝統文学には見られなかったみずみずしい新鮮な文学をうみだすきっかけになった。そのおのずからに滲み出ている哀感に読者は胸を撃たれずにはおられない。特に作者によって描かれた藝という愛すべき女性の姿は深く読者の脳裏に刻み込まれて永遠に忘れられることはないであろう。」(引用松枝「解説」より)

それまでの封建時代の男女恋愛小説の主人公たちと違い、ただの「一目ぼれ」で駆け落ちや死を求めることなど、たとえ、情死で始末した梁山泊と祝英台、崔鶯鶯(西廂記)や林黛玉(紅樓夢)のような物語の主人公たちではない。冒辟疆と董小宛の封建時代の身分差のある男女関係の枠、人性や夫婦間の深愛に基づいて、時代や社会を超え、人類や人間社会の夫婦間の人性に基づく愛情話のことである。

『浮生六記』の主人公夫妻の互いの愛着感のように、時代や社会の制限を超え、靈魂まで互いに愛し、本当にあの時代には類のない特殊なことで、いままで国内外の事例を見ても稀少だといっても過言ではない。それが人間性の美を一般的な価値のある事例として我々に残していることが、繰り返し吟味すべきことであろう。沈復は、ある意味で「艶福清才」で愛様の奥さんと文学史上に「留痕」ができたことで人生を巧みにかなえた達者である。日本では昭和13年より、岩波書店から佐藤春夫・松枝茂夫訳の初版を出版して、それから80年を経て今日まで再版している。

2 日常茶飯事外の生活にある楽しみ

夫婦間の情趣恩愛を幾つも映す瞬間

芸はお嫁になって間もなく、「私はもっと一緒に寝ていたかったけれども、彼女の正しい言葉をもっともだと思ったので、それ以来私まで自然早起きするようになった。これより耳や鬢を磨りつけ合って、その親しさはあたかも影の形に添うがごとく、おたがいの愛敬の情はとても言葉では言い表せないものがあった。」

しばらく離別後、「そこにいる三カ月はまるで十年のように長かった。芸からは時々消息があったが、それとて決まって二度に一度の返事、しかもその半ばはたいい励ましの言葉で、あとはみなとほりいっぺんの決まり文句なので、心は鬱々として楽しまなかった。中庭の竹むらを風が通り抜ける時、窓の芭蕉に月のさしのぼる夕べ、景色に向かえばいよいよ人の戀しさがまさって、夢にうつつに魂は宙を飛んでいた。」

「その年の七夕に、芸は蠟燭や果物を供えて、我取軒でいっしょに織女星を拜んだ。私は「願生生世世為夫婦」という印象を二つ彫った。そして、わたしは朱文を執り、芸は白文を執って、それを二人の交はす手紙に用いることにした。」

「私は生まれつき不羈奔放な男で、竹を割ったような気性だった。それに反して芸は道学先生のように馬鹿丁寧で、とかく礼儀ばったことが多く、たまたま着物を着せたり、袖口を揃えてやったりする時には、決まって「すみません」を口から話さず、またハンカチを取ってやったり扇子を渡したりするときには、必ず立ち上がって受け取った。私は最初それがいいやだった。そこで、

君は禮でもって僕を縛ろうというつもりかい。諺にも『礼多ければ必ず詐る』とあるよ」といって、芸は両の頬を真っ赤に染めて、「恭しくして礼があるのを、どうして詐りだとおっしゃるのでございましょう」。私、恭敬というものは心のなかにあればいい、虚礼にあるんじゃないよ。芸、「最も親しい人と言えれば父母にまさるものはございませんが、その父母に対して、内心で敬(うやま)っているといっ、見掛けは放埒にふるまってもよろしゅうございましょうか」。私は、「いや、冗談だよ、いま僕がいったのは」。芸、「世の中の仲たがいはたいい冗談から起こるものです。これからどうかわたくしをつまらぬ事から悶え死させるような事のないようにしてください」。

そこで私は彼女を引き寄せて胸を抱き、いろいろに愛撫してあやまったので、やっとな機嫌を直して笑顔を作った。それからというものは「どういたしまして」と「すみません」とはどうとう言葉の合の手のようになってしまったのであった。

かくて夫婦相愛し相敬すること二十三年、年が経るとともに情愛はいよいよこまやかさを増やすばかりであった。家庭のなかで、暗い部屋で行き合わせるとか、狭い通路ですれちがったりするときには、必ず手を握って「何処へ行くの」とたずね合った。内心はびくびくもので、ほかの人が見てやしないかと気かねながら、しかも実はいくも坐するもみないっしょで、初めのうちこそ人目を避けも下が、いつのまにかそれも気にしなくなった。

芸が人々と話でもしているところへ私が入っていくと、彼女は必ずすぐに立ちあがって、その身体を横にずらせる。と、私はそのわきにちょこなんと腰をおろして二人並ぶのであった。おたがいに二人とも何のゆえとも全く気づかずにそうするので、初めのうちははっと気がついて顔を赤らめたものだが、すぐまたいつのまにか期せずしてそうしているのであった。ところで私にとっ、てどうも不思議でならないのは、長い年月夫婦くらしをしていながら、おたがいにまるで仇同士のようにいがみ合っているもののあることで、これはいったいどういうわけだろう。ある人によれば、そういう風でもなくてとはとても共白髪まで顔つき合わせておられるものじゃないというのだが、ほんとうにそうしたもののなののでしょうか。」

「七月十五日は俗に「鬼節」と言われている。芸はいささかの馳走をととのえ、月の出をまって大いに飲もうと心はずませていた。ところが夜に入って急に黒雲が立ち込め、真っくらくなってしまった。芸は浮かぬ様子でいった。「わたくしがあなたと伴白髪まで暮らしたら、お月様はきつ

と出てくださいますわ」。

私としても味気ない気持であった。と見れば河向こうの岸辺に数知れぬ螢の光が、柳の土手や藜の生い茂った渚のあたりを、織るがごとく梳るがごとく明滅していた。

私は芸と気晴らしに聯句を始めたが、両韻の後は附ければつけるほどまるで滅茶苦茶となり、とんでもないこじつけを飛ばして、口から出まかせの句を聯ねた。芸はもう涎を垂らしに涙を流して、わたしの胸に笑いこずれて声も出せないでいる。と、その鬢にかざした茉莉の花のつよい香りがつうんと鼻に来たので、彼女の背中をたたきながら話の筋をかえて、「僕ったら茉莉の形や色が珠に似ているところから、古人が粧いを助けるものとして鬢に挿ようになったのだとばかり思っていたら。どうだ、この花が髪油や白粉の気に染むと、その香りも存外愛すべきところがあるんだね。これじゃお供への佛手柑なんか、恐れは入って逃げださるうな」というと、芸はようやく笑いを納めて、「いいえ、佛手柑は香中の君子で、いわば有意無意の間に在ってそれとなくほのかな香りをただよわせるといった風情がございますが、それに比べれば茉莉花などは、まあ香中の小人といったところですね。ですからどうしてもほかのものの尻馬に乗っていかねばなりません。その香りもで小人が媚びへつらってお追従笑いをしているみたいですよ」。「そんなら君はなぜ君子を遠ざけて小人を近づけるのさ」「いいえ、私は君子を笑って小人を愛しているだけなんですわ」。

(巻二 閑情記趣 (かんじょうきしゅ) (趣味の生活) 夫婦間の情趣ある美的交流

『浮生六記』の作者は、苗字(姓)は沈、名は復、字は三白、号は梅逸、別号壽生²⁵、清の乾隆二十八年(1763)蘇州の読書人の家に生まれた。彼は、若者の頃、観察力や想像力は抜群な才能があった。「また非常に細かいものを見分けることが得意で、そんなのを見つけると、必ずその形や模様を微細に観察して、俗世から抜け出したような気持ちになるのであった。」つまり小から大、大から小を見る力、小から現象を知る力。特に微小の世界に対して、虫や爬虫類や花や魚などの観察など上手にできるし、妻との共有や楽しみ鑑賞などで日常暮らしを過ごすことができる。

ついては、幾つかの例を巻二より参考にしよう。

「芸とは言えば、簪を抜いて酒に換ゆるのに、つゆ嫌な顔を見せたことがない。」

「貧しい読書人は起居服食から器皿房舎にいたるまで、できるだけ儉約をし、同時に清潔風雅でなければいけない。」

「蓮の花は夏咲き初めのうちは、晩にしぼんで暁にひらくものである。芸は小さな絹の袋に少量の茶の葉をつまみ入れて、花の芯の中に入れて置いた。そして翌朝それを取り出して、天泉水に沸かして飲むと、まことにえもいわれぬ香りがするのであった。」

いずれも、夫妻をはじめ、友人との付き合いや日常のなか、美を発見して共有し、堪能してい

25 中国古代の人は、冠名という注意を払うことがある。いわゆる「名以正体、字以表德、号以寓怀」、この三者は、一人の品格づける意味がある。なので、とても大事な人生儀礼である。簡単に言えば、姓は家族系統の名前、名は自分の本名、号は自分のセンス表現、さらに別号もいろいろできるが、本文の主人公は、上の順で沈復、三白、梅逸、壽生などのように、その人の品格が表す。福あり、妻と恩愛、養生志向などを意味する。《礼記・士冠礼》:「冠而字之、敬其名也。君父之前称名、他人则称字也。」勿論、古来の原則もあり、《左傳・桓公六年》:「名有五、有信、有义、有象、有假、有类。」などを定めてある。

くようなことは有意味な人生の渡り方である。

「鉢の中に花と石とを點綴して作る盆景は、小なるは繪にかいたかと思わせ、大なるは大自然そのままかと思いまどわせるには十分である。一杯の清茶は、その中にすっかり心をうちこんでこそ幽けき書斎のたのしみとしてふさわしい。」

「これらを推していけば、幽けく 趣味を得る道は無限にあるのであって、いちいち挙げられない。」

「若しそれ園庭、棲閣、離れ、廻廊、築山の石の配置、花果の栽培となれば、やはり大中に小を見、小中に大を見、虚中に實あり、實中に虚あり、あるいは藏あるいは露われ、あるいは浅くあるいは深く、単に集廻曲折の四字にとどまるべきではない。」

「儉約の法は時と場合に応じて機転を利かせることであるといわれている。私は簡単に飲むのが好きで、皿敷の多いのを喜ばなかった。そこで芸は私にために梅の花型の蓋物をあつらえた。それは二寸の白磁の深皿六枚を組み合わせたもので、真ん中に一枚、外側に五枚、その形が梅の花になるように並べて、漆食でかためたものである。底と蓋はいずれも凹んでいて、蓋の上には花蒂のように柄がつており、これを卓上に置いたところは、一枝の墨梅が宅に下向きに落ちたようで、蓋をとると料理が花瓶の中に入っているかと思わせるのである。ひとつの蓋物に六種類の料理が入っているのだから、二三の心おきない友人とともに随意に取って食べるには十分である。もしも食べ残したらまた沿えればいいのである。別に低い縁のある丸皿を日臆あつらえて、それに杯やコップ銚子の累を入れておくことにした。これだとどこへでも並べられるし、取り扱いにも整頓にも便利である。以上は食物儉約の一端である。」

前述のように、庶民（市井）文化がよく発達した江南の町だった蘇州は、すでに南宋以来、商業発達していることで有名な町である。

沈復は、その蘇州に生まれ、弱冠後、幕僚や商売などを経て、晩年の頃、冊封使の私人秘書として来琉し、帰郷の後、素案のある前四記に組み合わせ、後二記の「中山記歴」と「養生記道」を書いて、『浮生六記』と冠名して彼の唯一の手記小説として世の中に写本が伝播した。清の嘉慶十三年（1808）頃に成書ができた。最後に、光緒年間で活字として出版するまで、幾つかの抄本として蘇州周辺にも流行したが、残念ながら、晩清の戦乱で残されたのは、前四記のみだった。つまり、特に第五記の散逸は、文学史上の価値に加えて史料上の損失も大きく、特に晩期の琉球国に関する情報の紛失は計り知れない損失である。

沈復は、清末の稿本の再発見まで、すっかり世に忘れられてしまっており、町での小人物で、学者でもなければ有名な文人でもなかった。王朝時代によくみられる孤独高遠な士大夫でもなかった。ただし、その時代の雰囲気なかで育てられ、一般の知識人の素養を持っている。このような無名な素人が文学史上に名を残したことは、確かに奇蹟のように見えてくる。後世の人々の再発見で名前を知られ、中国外の多数の国々の人々にも愛読されてきた。日本の場合、1938年にすでに翻訳出版され、その後も再版される。振り返って考えると、どうして沈復は一気に史上有名になったのか不思議なことである。「この一作によって文壇に名を成そうといった野心は棄にたくもなかった。人の世に生きることに疲れ果てた人が、愛する人の在りし日の面影を偲んで、思い出せるまま書き留めただけである。」（松枝訳より）

『浮生六記』は、作者とその妻の人生をメインラインとし、日常的で興味深い家庭生活や浪漫

的な夫婦愛の日常暮らしについて気の合う日常茶飯事など、彼が見聞きしたことを叙述した。普通の肉食主義の生活を送るなか、幸愛な芸術的な暮らしを送りたい著者と妻の陳雲との愛情を描いた作品であり、確執的な倫理観の抑圧と貧しい生活の苦しみにより、ついに理想が打ち砕かれた。彼の場合、亭主閑白という男性中心主義のセンスが全く見えず、かえって、「もしや幸薄く生まれついた人ではあるまいかという予感も抱いた。」という風に表現されている。

また、自然環境のなか、動植物などへの観察や鑑賞などで、夫婦生活を潤した。

「私の閑居には、机上の花瓶に花を絶やしたことがなかった。芸がいった。」

「あなたの挿花は風晴雨露のあらゆる風情を備え、まことに精妙神に入ると申すべきです。しかし絵画には草虫を添える一法がございます、どうしてあれに倣ってなさいませんか」

「だって虫はこっちの注文どおりじっとしてやしない。真似ようたってできはしないではないか」

「わたくし名案があるのだけれど。でも俑を作る罪過が恐ろしいわ」

「いいから、いってごらんよ」「虫は死んでもその色は変わりません。蟻螂とか蟬とか蝶といった虫をとってきて、針で刺し殺し、細い糸でその首をしぼって花や草の間に繋ぎ、その足をそろえて茎にとまり葉を踏まえたりした恰好にすれば、まるで生きているのとそっくりで、きっと面白いにちがいないとぞんじますわ」

「私が喜んですぐ彼女のいう通りにやったところ、見る人ひとりとして賞嘆しないものはなかった。婦人のなかに今日こういった物の味を解する人を求めようとしても、恐らくは得られまい。」(巻三より)

作品の文章表現はみずみずしい生活味を新鮮かつ誠実に、装飾のないまま出来上がる。まるで芸の「留痕」として「秋侵入瘦菊花肥」のようなものである。プロットは、夫婦がお互いを深く愛し、死ぬまで変わらないというものである。それは喜びで始まり、悲しみで終わり、異郷の地をさまようことに終始し、とても悲しくて感動的である。しかし、このような些細な生活を通して、人間的な情感・情愛の真摯な感情生活から見えてくるのは、おそらく時代を超え、つぎの世代に伝えるべき価値ではないのか、と筆者は思う。

つまり、現実的社会で、いくら残酷さ、無情さがあっても、けっきょく人間同士としての生き甲斐があるはずである、と信じて、波瀾万丈な夫婦愛・恩愛の日常暮らしから醍醐味を堪能することを引き出す。夫妻の間、鶼鶼深情（比翼鳥および比目魚の喩えより）のほか、情趣ゆたかに保ちつつ、それによって暗黙の前道を一筋の光が照らしている。

3 日常暮らしをめぐる頓挫があっても平常心（巻三 坎坷記愁（不遇に泣く））

昔の中国のことわざで日常茶飯事を意味する「朝扉を開けてから、七つのこと、柴、米、油、塩、醬、酢、茶」、七件の日常茶飯事で人々の生活様式を営んでいた。複雑な社会生活にある家庭暮らしは、家族や夫婦間が些細なこと、口回しのことがよくあるだろう。それらは、巻三にて、坎坷記愁つまり、訳すれば「不遇に泣く」というタイトルで記した。

人生の不遇・不調や艱難辛苦ということは何故か？一般論で自業自得が理由だともいえる。沈復は、自問自答のように、ただの因果応報には、自分に当たらない。自分の言動や父までの言動でもよさそうで、ただ夫妻ともに社会のキツチュ²⁶⁾できず、「人間万事金の世の中」に溶けなく、

「女子の才なきはすなわちこれ徳」とは、「まことに千古の至言であった。」そのため、「まずつまらぬ輩の口さがない取沙汰に始まり、次第に同族の人々の非難を招くに至ったのである。」

「人生の坎坷不遇というものは何から起こるのであろうか。それは往々にしてみな自業自得と行ってよいようだ。しかし私の場合はそうではなかった。友情に厚くて人に頼まれるといういやと言えぬ、しかも率直でものに拘らぬ性分が、変わってさまざまのわざわいを引き起こす原因となったのである。ことに私の父の稼夫公ときては、いたって気前のよい侠客肌のお方で、人が困っているのを見れば、自分のことはさしおいても世話してやるという風で、人の娘を嫁づけてやったり、よその子供を引き取って育ててやったりなさったことは、指折り数えきれぬほどで、金を捨てることまるで泥芥どろあくたを捨てるかの用であったが、それとて大半はみな他人のためであった。一方、私たち不負の生活とは言えば、たまたま金が入用だというときには、質入れでもするほかに手はなく、それも最初のうちこそ何とかやりくりをつけていたが、ついには二進も三進もいなくなってしまう。諺に「人間万事金の世の中」というとおり、まずつまらぬ輩の口さがない取沙汰(とりざた)に始まり、次第に同族の人々の非難を招くに至ったのである。「女子の才なきはすなわちこれ徳」とは、誠に千古の至言であった。」

人間性というものは何だろうか、と問うと、人間性はプラスとマイナス側面の両方をもつ性格のことである。

人間という生き物は、実に妙なもので、ほかの動物と違い、つまり生物的と社会的という二重の性格を持ちながら「演化」²⁷する唯一の生き物である。一人ひとりの遺伝子欠陥という天然的な問題の外、ほぼ社会的、いわゆる後天的問題を理解するほかならぬ外部影響によって生まれた問題である。つまり、世の中に生まれ育てられる環境や躰などの不足や歪み教育などのせいで先天と後天の要素がお互いに結ばれ、どうしても心根の悪い人間が存在し、生活の場や仕事の場、そして家族の場合にも不愉快や虐め、意地悪、悪戯などの心境に置かれた人を避けられない。つまり人間性のマイナス面もいわゆる「平凡な悪」²⁸という善としてプラス面に相対化されて直面しなければならぬ。これは、こうした環境のなかでは、自己修復より自己毀損という役割を果たす。これを内部にある現象として、「党争派閥」より、近年学術領域でよく流行ってきた用語、インポリューションという現象で現すのは、当然なことである。

「芸との間に生まれた娘は青君せいくんと名付けて、当時十四歳であったが、相当書物も読めるしそれに極めてしっかりとした賢い娘で、着物や頭道具あたまぶどうぐを金に替えるため質屋通いもするし、まめまめしく立ち働いて力になってくれた。男の子は逢森ほうじんといて、当時十二歳になり、師匠に付いて学問をしていた。私は数年続けて幕友の職を失い、家門の内に書画店を開いていたのであるが、三日分の収入は一日分の支出にも足りず、焦燥と困苦とでへとへとになって、いまはこれまでと思ったことも一度や二度ではなかった。冬のさなかというのに服が無くて、やっとの思いで過ごした

26 キッチュ(ドイツ語: Kitsch)とは、「俗悪なもの」「いんちきなもの」「安っぽいもの」「お涙頂戴式の通俗的なもの」などを意味するドイツ語で、文化批評用語として用いられる。英語でも同じ綴りで浸透している『ウィキ』より。

27 「演化」という言葉は、中国語で Modern synthesis という言葉の対語訳である。つまり、元来の「進化」という言葉と区別するため使われ、日本語の対語はまだないそうである。現代総合進化論(現代総合論とも呼ばれ)は、ダーウィン進化論の概念をメンデル遺伝学と融合させ、進化の統一理論をもたらす。(The Modern Synthetic Theory of Evolution (also called Modern Synthesis) merges the concept of Darwinian evolution with Mendelian genetics, resulting in a unified theory of evolution.) Oxford Bibliographies より。

28 「凡庸の悪」ともいう。ユダヤ人の政治哲学者ハンナ=アーレントが、親衛隊中佐としてホロコーストに

こともあった。青君も同じことで、一枚の服でぶるぶる震えながら、寒くなんかないわとけなげにも痩せ我慢を言うのであった。そのため芸は誓って医者にもかからず薬も飲もうとしなかった。」

「やがて、五鼓ごこに近く、お粥を温めて一緒に食べた。芸はつとめて笑顔を作って、いつかお粥を食べて一緒に今日はお粥を食べて別れるのね。傳奇でんきを作るなら、「吃粥記きつしゆき」と題名を付けたら良いのではないだろうか。

逢森あいもりはふとその話を聞いて起き上がって、「母さんどうしたの？」と叫んだ。「これからお医者に行こうとしているんだよ。逢森、どうしてこんなに早く起きたの？芸はお姉ちゃんと家でおとなしくしているのですよ。おばあさまに嫌がられるようなことはするんじゃないよ。母さんはおまえの父さんと一緒に行って4、5日もすれば帰りますからね。」

鶏にわとりが鳴き出したので、芸は涙を浮かべながら、老婆ろうばの肩にすがって、裏門を開けて出て行こうとした。と、その時、逢森が突然わっと泣き出して、「あっ、母さんはもう帰ってこないんだ」と叫んだ。

青君は、人が目を醒ましてはと恐れて、慌ててその口を覆い、慰め哄かした。その時、われら二人のはらわたは既にちぎれて、ひとことも言えず、ただ泣くな、泣くなとなだめるだけであった。青君が門を閉めたあと、芸は路地ろじを出て十歩も行かぬうちに、もうすっかり疲れてしまって歩けなくなったので、老婆ちようちんに提灯を持たせ、私が芸を背負って行くことにした。

もうすぐ船着場だというところで、私たちはすでに、巡邏じゆんらの者に捕まえるであったが、幸い、老婆が芸は病気にかかっている自分の娘で、私はそのだ壻むこだと言いつくろってくれ、それに水夫たちがみな華家に働いている雇人で、物音を聞きつけて迎えに来てきて、みんなに介すいふされて舟に乗った。縄を解いた後、はじめて芸は声こゑを放はなつて痛哭つうくした。この別れこそ実に彼ら母子にとつての永わかの訣れであったのだ。」

「それから（嘉慶十一年、1806）十月も末になって、やっと山東ほうきゆうかほうの俸給加俸が下りたので、使いをよこして家族を迎えたわけであるが、その使いの者がもたらした手紙のなかに青君からの消息があつて、逢森が四月に夭死したことを知り、驚愕した。さきに逢森が私を見送って来たとき涙を落したのは、けだし父子の永の訣れであったと、いまにして思い合わされた。ああ、芸にできた一粒種ひとつぶねの男の子は、ついにその後を嗣ぐことができなかつたのか。塚堂もこれを聞いて痛嘆し、私に妾めかけを一人贈り、重ねて春夢に入るようにとすすめてくれた。それ以来、私は、再び喧々囂々たる世俗の塵のなかに埋もれてしまったわけだが、この夢の醒めるのは、さてまたいつの日のことやら。」（第三巻終わり）

このような中国江南地域の不遇な一人の秀才が、ある機縁で琉球にこられたことがある。残念だが、琉球に関する第五記が散逸したので、今日、沈復の琉球への旅とその影響は間接的な情報に基づいて推測することしかできない。まず、元の抄本を直接に見た管貽蓀かんいそく（字樹荃）²⁹による冠頭詩、《分題沈三白処士〈浮生六記〉》を検証してみよう。この詩の前に、小序に、「長洲沈処

関与したアドルフ＝アイヒマンの裁判を記録した著書の中で示した、一般の社会人のなか、思考や判断を停止し外的規範に盲従した人々によって行われた陳腐なものだが、表層的な悪であるからこそ、社会に蔓延し世界を荒廃させうる、という考え方。

29 ここは、この詩の原著者は、兪平伯の訂正によって「管貽蓀」に改正した。管貽蓀（字樹葵）は管貽蓀の従弟である。前刊文章の注11を参照してください。管貽蓀（1788—1848）、字樹荃、号芝生、江苏阳湖（今常州）人、嘉庆十八年（1813）举人、曾任河南固始县知县、福建兴化知府、工诗词、著有《湘西斋诗草》二卷、

士三白以〈浮生六記〉見示，分賦六絶句。』³⁰。この詩には七絶で六つの詩の組みがあり、ちょうど一組の詩が一つの「記」を歌っている。これにより、六つ組の詩でその本の概要を理解することができる。

この詩もちょうど六組で、つまり、巻一より巻六までの概要の紹介になっているとみられる。劉樊仙侶世原稀³¹，瞥眼風花又各飛；贏得紅閨傳好句，“秋深人瘦菊花肥”³²。烟霞花月費平章，轉覺閑來事事忙；不以紅塵易清福，未妨泉石竟膏肓。坎坷中年百不宜，無多骨肉更離披；傷心替下窮途淚，想見空江夜雪時。秦楚江山逐望開，探奇還上粵王台；游踪第一應相憶，舟泊胥江月夜杯。瀛海曾乘漢使槎，中山風土紀皇華；春雲偶住留痕室，夜半濤聲听煮茶³³。白雪黃芽說有無，指歸性命未全虛；養生從此留真訣，休向嫿環問素書³⁴。

前文で、筆者が注の26番目に、張一民（劍鋒冷然）「新發現記叙沈三白及其姪人華萼の題画

《裁物象齋詩鈔》等。さらに、管貽荏はもう一つの身分が明らかになってきた。それは、如皋にある安定書院の院長を務めたことがある。これは、道光『如皋縣志・学校』にある「院長題名録」の記載でわかる。これをきっかけに沈復のこの如皋の十年（顧翰《寿沈三白布衣》诗中那句“偶因币聘来雒皋，十年幕府依青袍”，嘉庆十六年（1811）至道光二年（1822）くらい幕僚暮らしのなか、お二人の付き合いが深めて、『浮生六記』の原稿を自ら見させていただいたことがあり、そして詩を題してもらった可能性があったのではないのか、と徐繼康という方より「沈復和他画的《水绘园图》」という文章の紹介でわかる。（2021-12-03『文汇报』）、また、管氏は、もう一つの身分は、世の中に知られず、如皋書院の院長を担当したことである。これは道光『如皋縣志・学校・院長題名録』に記載があり、多分、その際、彼は沈復の『浮生六記』の原稿を読んで題詩をした時はその頃であった、と推測される。

30 江蔚庐「关于浮生六记作者沈复四事」汕头大学学报 [J], 1995 (1) : 33-39.

31 劉樊仙侶は晋の劉綱とその妻樊夫人の物語のことであり、前漢時代の物語で『神仙伝』に収録される。上虞縣の縣令となって、妻の樊夫人といつも術比べをしていたが、全く勝てなかったが、最後で二人とも「道」を修練してから仙人になって一緒に昇天するが、劉綱は木に登って、やっと昇天することができた。

32 劉樊仙とのペア関係は世界でも珍しく、一目ぼれの後、風と花が惹かれて再び別々に飛んでいく。赤の閨房より佳句を伝えきて、「秋には人は瘦せられ、菊は太っている」という良い文章を深く裏付ける。

33 「春雲偶住留痕室，夜半濤聲听煮茶」、春雲：春天的云。喻女子的美发。唐代李中《春云》詩あり、元曲徐再思《梧叶儿・春思》曲：“鴉鬢春云髻，象梳秋月鏡，鸾鏡晓粧迟。”《花月痕》第七回：“春云低掠两鴉鬢，小字新镌在玉山。”ここでは、沈復とともに琉球の旅ついていた如夫人の華萼（字宛如）の喩えだと筆者は思う。ここは、亡妻陳芸への思念のセンスは、一目瞭然だ。

34 白雪黃芽說有無，指歸性命未全虛；養生從此留真訣，休向嫿環問素書。白雪黃芽とは、道家煉丹之術、常稱水銀为「白雪」、鉛为「黃芽」。或は“黃芽白雪”指氣功練習者在練功時感覺到眼中出現黃色光（黃芽）和白色光（白雪）。明代彭好古在《悟真篇注》中说：“黃芽白雪非二物也。初煉則感土氣而成黃芽，久煉則感金氣；坎離而已，陰陽而已。離中有真陰，陰數六，雪花六瓣，故以白雪喻離卦真陰；坎中有真陽，外为坤體，生于坤位，坤为地为土，其色黃，芽喻生机，真陽生机洋溢，起死回生，故以黃芽喻之。道家真正的經典都是立言明象，設象指意，本没有那么复杂，只是围着陰陽說，围着樞機說，皆是譬喻而已。《太古集》的诗句，郝大通祖師的金丹詩。無相門中堆白雪，虛空藏里产黃芽，讲的是修行的的門路。白雪和黃芽都是丹經中的隱語隱喻代詞。常清常靜入大道。正如《太上老君說清靜經》和《高上玉皇心印妙經》說的那樣。長生路上行人少，只仙客与道家，長生路上行人少，能够在这条修行求道、修成仙長生道路得真傳的人不容易。果如道家「無事生定」之謂；真訣は、秘訣、妙法のこと；嫿環というのは、神話中天帝藏書處のことを謂う。清 張篤慶《聊齋志異》題辭：“嫿環洞 里傳千載，嵩岳 云中进九華。”清 袁枚《續新齊諧・麒麟喊冤》：“不特帝所無時文，即 嫿環洞、二西山 亦從無此腐爛之物。”《素書》- 中国謀略第一書《素書》以道家思想为宗旨，集儒、法、兵的思想发挥道的作用及功能，同时以道、德、仁、义、礼为立身治国的根本、揆度宇宙 ... 素書相传为西汉张良作，多讲为人处世之道。有时被认为是黄石公三略的一部分。黃公，即黃石公；《素書》，相传乃其所著

詩」の博客により、如夫人の華萼（字宛如）とともに琉球に来られたことを、初めて明らかにする。つまり同『彙編』康発祥の《小海山房詩集》に《題沈三白福携姬婦去図》という詩があり、その小序には、“三白は冊封琉球を佐使させ、姫人の華萼は字が宛如、カンファーや武術（舞槍撃剣）に卓越し、出游の際、いつも同行させる。特に呉門あたり新居を築く、終焉の志があり。友人よりその絵が見させ題詞を求め、残念ながら対面したことがないのに、紙面で筆を応対した。」詩の全文を以下のようにしておく。

康発祥《寿沈三白布衣》詩は、
 昔聞沈東老，家貧樂有餘。
 床頭千斛酒，架上萬卷書。
 我觀三白翁，踪跡母乃似。
 無心慕榮利，不肯傍朝市。
 當年曾作海外游，記隨玉冊封琉球。
 風濤萬里入吟卷，頓悟身世如浮漚。
 人間得失等毫髮，一意率真非放達。
 橋邊孺子呼進履，當代大臣來結袜。
 偶因幣聘來雉皋，十年幕府依青袍。
 買山無貲去婦隱，腸繞吳門千百遭。
 吳閶門，虎阜寺，高道名僧日栖止。
 期君結屋相往來，拊掌一笑林花開。
 贈君以湘江綠筠之杖，飲君以幔亭紫霞之杯。
 腰纏不羨揚州鶴，歲々同看鄧尉梅。

民間「浮学」研究者である天風上人によると、この五七九言が混雑する古詩、全詩の韻は六回の転換によって、基本の七言に五言、三言または九言をいれ、詩の回転変換で沈復の豊かな人性を表現できるようになっている。だいたい李白の「夢游天姥吟留別」の氣勢があるらしい。

最初の四句は、沈復が約十年間如皋で過ごした時、その無力感やホームシックについての描写、最後の八句は、蘇州に戻った後の現状について書かれている。

待望の「家」がついに実現し、友人としての顾翰私は喜びを抑えきれず、「掌を撫でて森の花に微笑む」と心から花のように咲かせて祝福したという。

今は（森の花が咲く場所に）居場所があるので、「湘江の緑牡丹の杖を与え、幔亭の紫霞の杯で飲む」のである。湘江緑牡丹と万頂紫霞の組み合わせはとても優雅で、万頂（別名：武夷山）紫霞（長寿を吸う不老の杯）は、顾翰が杖と不老の杯で沈復の長寿を祝っており、理にかなっているとと言えるだろう。

「揚州の鶴は羨ましくないが、鄧尉の梅は毎年見ている。当たり前のようにだが、「年間」という言葉に注目したい。もし、沈復と如夫人の華萼が鄧尉で「結屋」していなかったら、どうやって「毎年一緒に鄧尉の梅林を眺める」ことができたのだろうか。」森の花とは、鄧尉山の梅の花である。

すでに自家は鄧尉に置かれたが、沈復の才能と性格、いつものスタイルからすると、自分の家に優雅な名前をつけたのだろう。前述の康熙祥の「題沈三白福携姬婦去図」の中の詩、「珠厓一部奇書也。此書傳授天人之道。原書上注明不可傳與不聖不賢之人，否則將引致天下大亂。

園里菟裘筑，闻说高风老是乡」を思い出してほしい。確かにそこは、珠厓園のことだ。

珠厓とは、もともと海南省瓊山県の東南にある地名である。この話は『漢書・武帝紀』や『賈捐之伝』に記載されており、その後、国境地帯を指す言葉として「珠厓」が使われるようになった。鄧尉は、姑蘇市から70マイル、山々と太湖に囲まれているところなのである。その地形は、海諷の珠崖と相当似ているはずである。

この詩の注によると、「華萼女史」すなわち沈三白の姫人と釈明した。「三白は冊封使の添いとして琉球へ参り、如夫人の華萼（字宛如）は、槍と劍の技が得意し、出かける際いつも一緒にし、特別に呉門で新築をし、そこで人生の終わりを送っていくらしい。）」

とはいえ、沈復は、自分の晩年生活の雰囲気によって始まったらしい。「春云偶住留痕室，夜半涛声听煮茶」について特に吟味したい。如夫人ともに偶然「留痕室」に滞在したのは、確かにともに偕行して「偶住」というニュアンスと言えるだろう。それで、「涛声」と「茶声」とも夜中の生活を見送りつつある。ただ、天使団のなかで地位はあまり高くないはずの私人秘書官である沈復は、琉球人との交流、交信さらに交心まで行けるか、疑問である。つまり正式に通訳づけ、交流のできるチャンスは少ないだろう。また、旅は坎坷のようになる一途だろう。

「蕭蕭落木送殘秋」（沈復『望海』詩）³⁵ここは、「晩秋」ではなく「殘秋」という蕭蕭な言葉が寂しく感じられる。白居易が「三月尽」は「留春春不住・春婦人寂莫」という「落花」³⁶。幸いにまるで「春云」のような如夫人を伴って偶然に「留痕室」に泊まり、夜更かしに眠れずに茶を煮込む音が海の怒涛の音に混じり合うことで、人生の吟味を紛争の世を離れ、養生の「真訣」への思い込みに入り、「素書」という俗世の間に求めないはずである。

4 視野を広げれば別天地（巻四 浪游記快 旅は楽しみ）

この巻では本人が友人たちを連れ、楽しく外遊するのは、人生の大快事ではないのか。特に苦しい時。「巻四」より：

同年の冬（嘉慶五年庚申1800、復年38）、わたしは友人のために保証人となった事で迷惑がかり、両親にお叱りを蒙って、錫山の華氏のもとに厄介になった。翌年の春、楊州に行こうかと思つたが、旅費がないので、上洋の幕府にいる韓春泉という友人を頼って行つた。しかし自分の見ずばらしいなりふりを思うと、どうしても役所の中にはいる勇気がなく、名刺を通じて郡廟の園亭で会いたい旨を申し入れた。彼はそこで私と会って、始めて私の困窮を知り、氣前よく十両の金を融通してくれた。その庭園は海外貿易商人の寄付でできたもので、非常に広大であったが、惜しむらく點綴の景物が点でばらばらで統一がなく、後方に豊んである山石も起伏照應がなかった。

35 盛唐の詩人杜甫『登高』詩に、無邊落木蕭蕭下「無邊の落木は蕭蕭として下り、不盡の長江は滾滾として來る。」この『望海』詩以外、沈復は、『琉球觀海圖』も描いた（石蘊玉「題沈三白琉球觀海圖」より知る）。本文、すでにもう終了に近づいている際、新しい情報が入ってきた。それは、陳毓熙教授の資料新発見は、実に問題があった。つまり、沈復の二つ琉球についての詩は、誤認である。その二つの詩の著者は、沈復ではなく、ほかの二人だった。作者の張一民氏は陳毓熙先生に披露された《浮生六記》の作者である沈復の三首の詩に対して考察を入れると、実にこの三つの詩の作者は沈復ではなく、別人（秦境と姚）だった、と発見した。まったくおせっかいのことだ。だからいわゆる沈復の「琉球佚詩」はまた偽作である。だからこそ、これからの沈復と浮生六記についての研究する際、とくにこの問題を要注意すべき。

36 白樂天にある「留春春不住、春婦人寂莫[春を留むれども春住まらず、春婦りて人寂莫たり]」（『落花古調詩』白居易：留春春不住、春婦人寂莫、厭風風不定、風起花蕭索（春を留むるに春住まらず、春婦つて人寂莫たり、風を厭ふに風定まらず、風起つて花蕭索たり）。（藤原定家『拾遺愚草全釈』和漢朗詠集「三月尽」により）。

その帰るさなか、ふと虞山の名勝を探ってみようと思いついて、折から便船のあった幸い、これに乗り込んだ。時は春の半ばで、桃李の花は妍を争っていたが、道ずれのない旅は物足りなかった。青銅銭三百文を懐に、足にまかせて虞山書院に着いた。塀の外から仰ぎ見ると、木立の間に花が交って叢樹に花が交じって、嬌かしい紅とわかい緑と、みずに添い山に由っている眺めは、きわめて幽趣に富んでいたが、残念ながら門のうちに入ることができなかった。途をたずね行くうち、天幕がけの茶屋あったので、そこに立ち寄って飲んだ碧羅春（茶の名）がじつにうまかった。「虞山ではどこが一番景色のいいか」と訊ねると、一人の遊覧客が、「ここから西關を出ると、劍門はじきですが、虞山では、第一の景色でござりましょう。なんなら私がお案内いたしましょう」といった。渡りに舟というわけで、さっそく同行してもらうことにした。西門を出て、起伏する山麓に沿って數里歩くうち、漸く山峯屹立し、石に横紋にある景色が展開した。いよいよ着いてみると、ひとつの山が中央から二つに分かれて、西方に岩壁は凸凹して高さ數十仞、近くから見上げると今にも落ちかかって来そうに思われた。「何でも言い伝えによれば、あの上に洞府があって、いろいろとこの世のものならぬ景色があるのだそうですが、何せ道がないものですから、残念ながら登れませぬ」と案内の男が言った。それを聞いて、私は急にむらむらと好奇心に駆られた。早速袖をまくり尻端折って猿のように攀じのぼり、ついにその巔をきわめた。いわゆる洞府とは、深さわずか一丈ばかりで、上の岩にポツカリと孔が開いていて天が覗かれた。首俯して瞰（見）下ろすと、足がふらふらして落っこちそうな気がした。やがて岩壁に腹這いになり、藤蔓にすがりつつおりました。その男がつくづく感に堪えたりいっていった。

「偉いものですなあ、豪気な遊山もあればあるもの、あなたのようなお方はみたことがござりませぬ」といった。私はのどが渇いて何か飲みたくなったので、その男を誘って山の茶屋で二三盃傾けた。日はすでに落ちかかり、あまねく遊覧してまわるわけにはゆかなかった。

せめてもの記念にと赭石十餘個を拾い、これを懐にして宿屋に帰った。それから笈を負いて夜航船で蘇州に着くと、また錫山にかえった。これはわが愁苦中の快遊であった。

「同じ見習い仲間に姓は顧、名は金鑑、字は、鴻幹、號を紫霞という男がいた。私と同じく蘇州生まれで、人となり慷慨剛毅、友情に厚く、いやしくも人に阿るということをしなかった。私より一つ年上で、私がこれを兄と呼ぶと、鴻幹も毅然として私を弟と呼んでくれ、心からの親友となった。これこそ私の第一の知交であった。だが惜しむらく、彼は二十二歳でなくなり、それ以後、私にはほとんど友達が少ないのである。今年もはや四十六にもなろうという私、はてしなき滄海に、果たして今生に生きている間に再び鴻幹のような知己に会うことがあるのであろうか。おもえば鴻幹と友交を結ぶや、心は高くひろく理想に憧れ、よく山居の想いをおこしたものであった。（有同習慕者、顧姓名金鑑、字鴻幹、号紫霞、亦蘇州人也。為人慷慨剛毅、直諒不阿、長余一歲、呼之為兄。鴻幹即毅然呼余為弟、傾心相交。此余第一知己交也、惜以二十二歲卒、余即落落寡交、今年且四十有六矣、茫茫滄海、不知此生再遇知己如鴻幹者否？）」（卷四より）

「嘉慶九年（1804、42才）甲子の春、父上の死を機に、今こそ家を捨てて隠遁しようと思いついたが、友人の夏揖山に止められて、暫くその家に厄介になった。

秋八月、揖山が農地を所有している東海の永泰沙へ、小作料集金の旅に同行した。その会計係は王という人であった。いずれ劣らぬ気前のいい客好きな人たちで、礼節に拘らず、私と一見旧知のごとくに親しくなり、豚を宰して肴とし、甕を傾けて飲むのであった。（中略）酒酣話になると、作男たちを呼んで拳の舞いや相撲をさせて楽しむのであった。百余頭の牛を飼っていて、それをみな堤防の上に露宿させていた。また鵝を飼っていたが、これはその鳴声によって海賊を

防ぐのであった。昼間は鷹や犬を駆って蘆の茂みや沙浜で狩猟をした。獲物は大抵鳥類であった。私もいっしょに付いて行って駆けまわり、疲れるとそのままごろ寝をするのであった。」

「人も自然も、さながら太古のごとき原始的な生活であった。

寢床に臥せったまま外を見ると、洪濤が見えるし、枕元に響いてくる潮の音は、金鼓鳴るがごとくであった。ある夜、突然、数十里かなたの沖あいに、籠ほどもある赤い提燈の浮かんでいるのを見た。また赤い光がまるで火事のような勢いで天をこがすのを見た。宝初はいった。

揖山はもともと豪傑肌の男であったが、ここへ来てますます放達になった。私ときてはいっそうそれに輪をかけて、牛の背中で狂い歌うは、沙浜で酔って踊るは、それこそ興にまかせてしい放題のことをして暮らした。「まことにこれは私の一生のうちでも最も拘束されなかった快遊であった。」

二 佐使琉球旅の端末 四記から六記へと

1. 琉球旅の情報に関する詩作

第五記中山記歴の散逸の替わりに

沈復という人物は、前文の紹介で生前にはあまり無名な地位で、様々な人生体験を得て、かえって、ずっと自分の憧れの生活や人生を堪能していきたいという積極的な姿勢が見えてくる。人生と言えば、多くの人の子供時代を経て、厳しい社会に入り、一所懸命に努力して前進していくという流れがあるだろう。ただし、成功や失敗はむろんのことで、そこに一人の人生観が浮かび上がってくる。成功後の楽しさや失敗後の消極的な態度などが表れる。もう一つ、成功してもそれが長く続くどうか、という問題もある。

沈復はあらゆることを試してきた。成功という点では、彼と妻の芸との夫婦愛、人間愛を深く理解したこと、あるいは夫婦の絆の深さが一番大きいだろう。同時に、長くは続かなかった夫婦愛の生活が、その後の人生を支え、陳芸娘への愛情は常に悟りのように彼の心の中に生き続け、年を追うごとに発酵し、まるやかに積み重なっていったのである。それは、人に対する思いやり、優しさ、山水に対する愛情、草花に寄せる情愛など、人生レベルで前向きに生き、単なる失望や憂鬱に陥らず、最後まで積極的に余生を管理したことである。

確かに、「人生は夢のようだ」。つまり、「人生は夢のようなもの、おもしろがって生きよう（浮世は夢のようなもの、おもしろがって生きよう）」ということであり、愛や恋も人生の価値の下地が見えてくるのだ。確かに、物質主義の世界では、感情や感覚を記録しておかなければ、せつかくの感情も無駄になってしまうだろう。

「私は、乾隆二十八年癸未冬十一月二十二日に生まれた。時はあたかも太平のお代、且つ士大夫の家系に生まれ、蘇州の滄浪亭の畔に生い立ったというのであるから、天の私に対する厚意は至れりというべきであろう。蘇東坡は「ことは春夢の如く終わって痕無し」と言っているけれども、もしかしてこれを筆墨に帰さずにましたのでは、かの蒼天のせつかく 厚意を無にしたことになりはないだろうか？」

このような人生観の持ち主は、国内外にもよく見受けられるだろう。例えば、「旅の途中でどれだけ楽しいことをやり遂げているかが大事なのだ」（スティーブ・ジョブズ）、「私たちは自分

が思った通りの人間になる」(ナイチンゲール)などの名言として後世の人々はそれを受け止めている。

この本の始まりで以上のように述べて、非常に明快な態度や姿勢が見えてきた。原稿を琉球に持ち込みながら、修正や吟味のなか、前四記を繋がりある第五記や第六記の腹案または初稿が出来上がったはずである、と筆者は思う。

2. 人生観を映すこと及び恩愛の理念

気の合う妻への眺め 第六記養生記道の繋がり

これにより、この手記的な本は、二つの筋で、全篇を描き貫く綴り紐になるだろう。一つは、愛妻への追想のことであり、もう一つは、余裕を持つ心境のことである。

前者は、夫婦愛に基づく愛情観であり、前も述べた「この作のモチーフとなっているものは、作者が夢寐にも忘れることのできない亡き妻芸の追想であろう。生生世世の契を誓いながら僅かに二十三年の悲喜を共にしたばかりで不如意のうちに他郷で死なせているのだから洵に然るべきことで、それも才情溢れるが如き彼女であってみれば一しほ無理ならぬ次第である。」を再度くぐり抜けてみると、後者は、閑情がある人生観が見えてくる。閑情とは、現代語の言葉で、レジャー(leisure)や余暇の意味に相当するだろう。ただし、特にここでは、心の余裕やお洒落のこと(閑情——画家形質——ボヘミアン精神)のことだろう。

このようなこと(文化要素)を記録して記憶に残し、「しかしその愛した朗君の手によって面影を千古に傳経られ後世の男子をして中国文学に於ける最愛の女性と呼ばしめるに到っては彼女の生も亦必ずしも不幸でなかったというべきであろう。」(引用 佐藤春夫「解説」より)

偶然の出会いで結婚することになった。平凡な一般女性であっただけでなく、「生まれつき非凡な才能を持ち、言葉を覚えると、すぐに『琵琶行』(元曲)を謡曲風に詠むことを教わっただけで流暢に詠めるようになった」のだ。彼女の家は貧しく、「家にはまともなものが一つもなく、壁が立っているだけだった」という。彼女は十本の指(女工、女性の手仕事を指す言葉)だけで3人の家族を養っていたのである。私と結婚してからは、その知性によって夫婦の愛にあふれた家族の日常を作り上げることができたのである。しかし、日々の苦勞に追われながらも、夫との心の交流は深く、時には言葉少なに表現し、夫を驚かせたこともある。秋の季節の変化や人の気持ちを表すちょっとした言葉で、私を驚かせてくれることもあった。

「秋侵入影瘦、霜染菊花肥」(秋は体を消耗し人が痩せられ、霜は菊の脂肪を染め肥えらせる)または(秋浸りって人影痩せ、霜染めて菊花肥ゆ)、後世の人々も文学的な名句として受け止めている。

審美観の見当たり

「もしかそれ園亭、樓閣、套室(はなれ)、廻廊、築山(つきやま)の石の配置、花果の栽培となれば、やはり大の中に小を見、小の中に大を見、虚中に実あり、実中に虚あり、あるいは蔵れ、あるいは露われ、あるいは浅く、あるいは深く、単に「周廻曲折」の四字にとどまるべきではない。さればとって地域が広く、庭石が多くて、いたずらに工事に金をかけたというだけが能でもない。あるいは地に掘り土を積みあげて築山をこしらえ、ところどころ石をすえて、草花をあしらひ、生籬は梅の木で編み、土塀には蔦をまつわらせると、築山などできそうもないところに立派な築山ができるのである。」

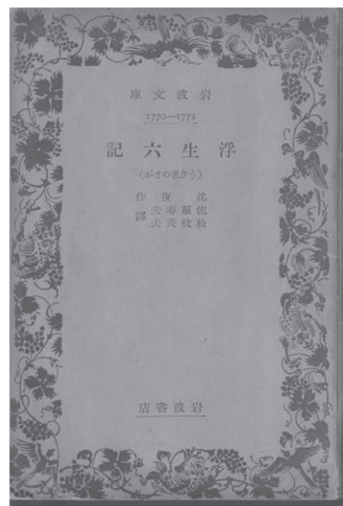
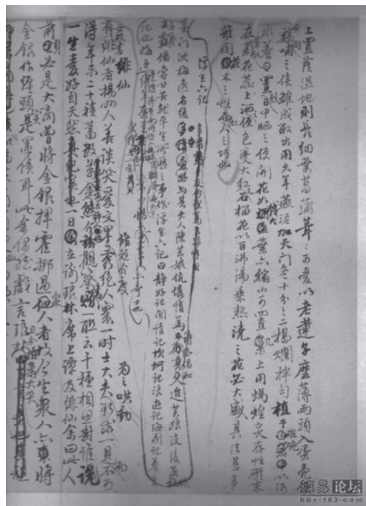
蘇州の名勝スポットに対して、次のようにコメントがあった。「わが蘇州の虎邱山の景勝とし

ては、私は裏山の千頃雲の一ヶ所を取る。その次は劍池のみである。その外はいずれも半ばは人工に藉かり、且つは脂粉に汚されてしまって、もはや山林本来の姿を失っている。たとえば最近できた白公祠にせよ、塔影橋にせよ、名前のみいたずらに雅を溜めているにすぎない。その治坊濱を私は戯れに「野芳浜」と改名したが、これなどと来たらいつそう脂粉の巷にすぎず、まったく妖冶そのものである。蘇州城内でも最も有名な獅子林は倪雲林の手筆と言われているけれども、且つ石の質が玲瓏で、古木も多いのだけれども、大勢からこれを観るならば、結局石炭のガラ山に蘚苔を積み、アリの穴を穿ったようなもので、いささかの山林の気も見られない。私の管窺の及ぶところをもってすれば、そのよさがわからぬのである。靈巖山は昔、呉王が美人西施を置いた館娃宮のあとどころであり、上に西施洞、響屨廊、采香徑の諸勝がある。しかし全體的にみて散漫でまとまりがなく、天平山や支硎山の幽趣に饒んだのに及ばない。]

四記より六記までに

錢泳氏が見たのは、どういう抄本なのか、まだ疑問も残っている。つまり、比較的早期のものだと、その『記事珠』の資料にある『浮生六記』の条によってわかる。その条には、『浮生六記』の各見出しでは、「静好記 閒情記 坎坷記 浪遊記 海國記 養生記」のようになるが、現在の印刷本では、皆「閨房記樂 閒情記趣 坎坷記愁 浪遊記快 中山記歷 養生記道」のようになっている。つまり、目的語を入れてさらに各文章の粋を引き起こされることになるのではないのか。同時に、前の見出しは、もっと先にできたものだと思う。

以下は、記事珠にある『浮生六記』条の記載を現在の『浮生六記』の活字本の各見出しの比較によって、その進化のプロセスがわかる。



左：原文の写し：「吳門沈梅逸名復，(多情愛好，多情篤于、括弧の中は、改ざんされた文章、下同)，(友朋誼篤，夫婦情深) 與其夫人陳芸娘伉儷情篤，(不歡其父)。詩酒倡和。迨芸娘沒後，落(拓不羈) 魄無寥，備嘗甘苦，就平生所歷之事，作《浮生六記》，曰〈静好記〉、〈閒情記〉、〈坎坷記〉、〈浪遊記〉、〈海國記〉、〈養生記〉也。梅逸，(終年奔走，在家之日常少，惜未一見其人)，嘗隨齊、費兩冊使入琉球，足迹幾遍天下余與梅逸從未一面；亦奇士也。」

右：1938年9月第1刷発行 岩波書店(現在より85年前)

その後、楊引傳より、蘇州の古本屋で発見されたのは、以下の四記しかないものだった。その

四記を持参する間、王韜氏より管氏の詩および目次を知り、その構成として、以下のように『六記』とは、卷一 閩房記楽（よきわが妻の記、結婚の幸福）；卷二 閑情記趣（のどか心あわれの記、趣味の生活）；卷三 坎珂記愁（ままならぬ人の世の記、不遇に泣く）；卷四 浪游記快（草枕おもしろの記、旅は楽し）；卷五 中山記歴（中山にありし事どもの記、琉球遊記）〔散逸〕；卷六 養生記道（世を捨てて道に生くる記、永生の道を求めて）〔散逸〕。

確かに、原作は六記の構成だったが、後二記が散逸してしまった。ただし、残念ながら、前のテーマごと違い、修正された進展の痕跡が見え、何々「記」の後、前より、名詞が動詞に変わり、次に目的語を入れてさらに読みやすくなった。さらに、その手記風の本は、四記より六記で構成され、作者は琉球・沖縄に来たことは、浮上して初めて後世の人々がわかってきた。

嘉慶十三年（1808）で、少なくとも素案ができたはずである。しかし完成とは言えないだろう。つまり、その年は、彼が冊封使の首席秘書官として琉球群島へ参る予定だったので、旅の公私たる準備で忙しかっただろう。言い換えれば、琉球に行く前に、『六記』より『四記』で完成のはずだろう、ということは、論理上で乖離しないはずである。

これ等の記は、ほぼ独立した短編の如くでありながらよく見ると、首尾応照の妙を極めて緊密に立体的に構成を持っているのは、驚くべきことである。また、「その目的がここにあったればこそ作者は、詩経の例に倣ふと申し訳をしながら、何を闇いても先づ卷の一に結婚生活の幸福から説き起こしたのは当然であった。さうして現在孤独飄零の身である作者の情感が自ら六記全篇を貫く基調となったもの亦当然であろう。

「このことは筆端の一度彼女に触れると生彩を生ずる所為でもある。この意味ではさすがに綿々たる亡き愛妻への追慕も稍盡きた形になっていたらうかと想像される巻五巻六あたりの失われているのは必ずしも惜しむに足りないのかもしれない。或はこの事実がその最後の二巻を散佚させてしまったのではなかったらうか。」（佐藤春夫「解説」より）

筆者は、前論考のなか、沈復は1808年に最初の四記を完成させ、琉球への渡航を楽に達成したと書いている。ただし、六記ではなく、四記のみで、このときすでに六記全体の執筆の構想があったのか、腹案があったのかという疑問が残るのである。これについては、紙面に限りがあり展開できなかった。つまり、沈復にとって琉球旅行は個人的に貴重な体験であったかもしれないし、最初の四つの日記をベースに次の二つの日記を書こうと考えるきっかけとなったのは間違いない。

この点、四記に過ぎなかった原著が、琉球旅行後に本当に「加筆」(冗長)されて六記の規模になったのか、それが沈復の視野を広げ、世界に対する認識や思考を高めたのか、現代の我々には分からない。しかし、数少ない資料を丹念に読み込むと、その端緒を見出すことができる。

もともと陳芸をめぐって四記で終わらせるつもりだったのだろうが、作者自身の生涯も続き、また、思いがけない琉球旅行の出来事にも遭遇し、著者自身も激動の世の中に流されず、堂々と生きていこうという自覚と勇気を持つことができた。

「これも、ひとたび筆先が彼女に触れると、命が吹き込まれるからだ。その意味で、第五巻と第六巻がないことは、亡き妻への思いが限界に達したと思われ、必ずしも残念なことではありません。あるいは、この事実が最後の二巻の紛失につながったのかもしれない。」（佐藤春夫氏のコメントより）

そのため、『六記』まで伸ばして書いた。巻五「中山記歴」というのは、おそらく琉球渡航記であっただろうということは、管貽蓀という人の題詩によって推察される。それは、上記の第五組の七

絶の句「瀛海曾乘漢使槎。中山風土紀皇華；春云偶住留痕室，夜半涛声听煮茶」とあるからである。第五卷の「中山記歴」（琉球遊記）で、その旅の概要を詩で表した。「瀛海曾乘漢使槎，中山風土紀皇華；春云偶住留痕室，夜半涛声听煮茶。」沈復の琉球滞在中の住所について、「六記」全文を目に通した管氏の詩より「留痕室」というところだったが、それは、「天使館」の正使について南楼すなわち長風閣左廂房³⁷の中の一室だろう、と推定されている³⁸。

かえって、琉球史料の乏しい現状として、「中山記歴」を取り入れることで、この手記にある外交資料的な価値が浮上ってきて、散逸してしまったことが、さらに人々の視線をあびてくる。ちなみに、巻六は、養生思想に基づく人生にある人間的な生活価値の思考の集大成としてまとめて書き綴りができたのだろう。

3. 愛の恒久 妻の眺め

この本の中で最も眩しいのは、林語堂から「中国文学で最も美しい女性」と呼ばれている妻の芸である。芸の存在がなければ、沈復の人生は面白くなかったであろうが、残念ながら、紅顔（赤い顔、とくに美人を指す）の人生は短命で終わってしまった。

これについて、王韜の話はとても興味深い。中国のことばで、綺麗な女性は半数以上の運命の珍しくないという紅顔薄命（中国語で hóngyán bómíng）³⁹の言葉がよくあるであろう。まるで赤ちゃんのみずみずしい顔や肌触りのような美人には薄命が多い。例えば、芸もそうだろう。

王韜氏は次のように解説をした。王韜かつて少年時代（少時、1847年前）、「由来、理には図り知れないものがあり、ことには必ずしも諾えないものがあり、情にはやむを得ないものがある。夫婦が一生偕老を期しても、その願いはかなえられることもあれば、かなえられないこともある。なぜかけだし美婦を得るためには何回も生まれかえって功德を積まなければならぬからである。しかも才色兼美の妻はとかく造物者の忌むところとなり、早く寡婦となるか、そうでなければ若くして死ぬ。しかしながら才人と才女が結ばれることは古往今来めったにあるものではない。

かりに結ばれたとすれば、たとえ寡婦となっても、若くして死んででも、何の憾むことがあるうか。まさしくただその寡婦となり、若くして死んだからこそ、その情はますます深くなるのである。

そうでなければ、たとえ百年顔つき合わせて暮らしていたからとて、何の香ばしいことがあるうか。ああ、人生には不遇の憾みがあり、蘭桂には零落の悲しみがある。古来、才色兼美の婦人でありながら、世に埋もれて身を終わり、鬱々として楽しまず、甚だしきは、足をすべらせて非行の道に墮ちるものもすくなくない。

37 四合院などの伝統的な一階立ての建築物には、正房（母屋）の両わきにあって南北に伸びる建物を廂房といい、護龍ともいう。

38 『歴代宝案・国王尚灝上嘉慶皇帝奏表』により冊封使団一行は「奉詔敕安於天使館」に滞在した。陈毓罍：《『浮生六記』研究》中国社会科学文献出版社 2012年出版 北京 p 15 - 16 参照。天使館の跡地は、現在的那覇市東消防署に近辺、那覇医師会館のところにあらしい。沈復は、その頃、正使に駐在する南楼いわゆる「長風閣」側の九つ室のなかの一室で「留痕室」を名付けられた、と推察される。海には今と違い、町の騒音も小さく、当時、埋め立ててなかったのも、静かな時代だったので、海の涛声が聞こえるはずである。約10年前に来た李鼎元のおなじ記載もある。

39 紅顔薄命の語源は、『漢書・卷九十七下・外戚傳第六十七下・孝成許皇后傳』「孝成許皇后上漢成帝疏」、すなわち「上疏言椒房用度」妾薄命：「其余誠太迫急、奈何？妾薄命，端遇竟宁前。」これが、女性が美しいが不幸に苦しむことを指す。

それよりは若くして死ぬ運命を与えられたものの方が、あるいはむしろありがたいとせねばなるまい。しかるに後の人々はこれに同情して、あるいは、その宿命のつたなさを嘆き、あるいは、その寿命の永からぬを悼むのであるが、これは造物者の善意を知らぬものである。

美婦にして才人と結ばれたならば、死んでも死なぬにまさるのである。かの凡々たるやからは、たとえ百年借老を遂げたとして、百年たたぬうちに跡方もなく消えてしまうであろう。造物者がこれを忌む所以は、つまり造物者がこれを成就せしめる所以ではあるまいか」(王韜の「跋」より)⁴⁰

「芸との間に生まれた娘は青君と名付けて、当時十四歳であったが、相当書物も読めるしそれに極めてしっかりとした賢い娘で、着物や頭道具を金に替えるため質屋通いもするし、まめめしく立ち働いて力になってくれた。男の子は逢森あいまりといて、当時十二歳になり、師匠に付いて学問をしていた。私は数年続けて幕友の職を失い、家門の内に書画店を開いていたのであるが、三日分の収入は一日分の支出にも足りず、焦燥と困苦とでへとへとになって、いまはこれまでと思ったことも一度や二度ではなかった。冬のさなかというのに服が無くて、やっとの思いで過ごしたこともあった。青君も同じことで、一枚の服でぶるぶる震えながら、寒くなんかないわとけなげにも痩せ我慢を言うのであった。そのため芸は誓って医者にもかからず薬も飲もうとしなかった。」

二人死別の近になると、芸は、二人の生活をまとめて言った。

「思えば私があなたの妻となってお仕えもうしますこと、二十三年、このふつつかな私をお見捨てなく可愛がって下さって、万事につけほんとに思いやりよくしていただきました。あなたほどの知己をわが夫と呼んでお添い申せたこととございますれば、私としてももはやこの世に何一つ思い残しはございません。」

「木綿の着物を暖かいと言って着、野菜にお茶漬けでおいしい、おいしい、と言って頂き、一室に泉水や庭石などを眺めて呑気に暮らしたあの滄浪亭や蕭爽樓の境地こそこの世ながらの神仙の生活でございました。」「これと申しますのもみなあなたはあまり情が深くていらっしゃるから、して又私があなたに薄命はくめいであったようでございましょう。」

「またあなたはどうか淑徳容貌兼備しゆくとくようぼうの方を後妻ごさいにおとりあそばして、御両親様に仕え、私の遺子を育てて下さったら、私安心して成仏できます。」とそこまで言うと、腹の中張り裂けんと思ひ、遂にこらえかねて、わっとばかりに泣きであった。

「君が万が一にも僕を見捨ててあの世に行ってしまったとしても、誓って後妻なんかとりやしない。ましてや「曾經滄海難為水、除却巫山不是雲」(人は滄海の経験きんけんを渡せば、その後いくら大水をあっても驚かせなく、長江の三峡を通過してあのぐらゐ山水雲霧さんすいいうんむをご覧になった後、ほかにみなくていい、の喩え詩である)、と言うではないかと言え、芸は私の手を握って何やら言いたげな様子であったが、やっとな途切れ途切れに「来世」の二字を繰り返しに繰り返すので

40 王韜氏(日中関係史上にも跡が残っていた人物)の跋の原文は次のように、「从来理有不能知，事有不必然，情有不容已。夫妇准以一生，而或至或不至者，何哉？盖得美妇非数生修不能，而妇之有才有色者，辄为造物所忌，非寡即夭。然才人与才妇旷古不一合，苟合矣，即寡夭焉，何憾！正惟其寡夭焉，而情益深；不然，即万年相守，亦奚裨乎？嗚呼！人生有不遇之感，兰杜有零落之悲。历来才色之妇，湮没终身，抑郁无聊，甚且失足墮行者不少矣，而得如所遇以夭者，抑亦难之。乃后之人凭吊，或磋其命之不辰，或悼其寿之弗永，是不知造物者所以善全之意也。美妇得才人，虽死贤于不死。彼庸庸者即使百年相守，而不必百年已泯然尽矣。造物所以忌之，正造物所以成之哉？」を参考。

あった。」

「ああ、芸は一介の女性に過ぎなかった。しかし、彼女は男も恥じるほどの襟懐^{きんかい}と才識とを備えていた。私のもとに嫁いでより、私が日々衣食のために奔走し、炊ぎの煙も途絶えがちなのを、芸は少しも気かけなかった。私が家居するようになってからも、ただ詩文について議論^{たたく}を闘^とわすただけであった。しかも彼女を病氣と貧乏のなかで、恨みを呑んで死なせたのは、一体誰の仕業^{しわざ}であろうか。私がこの間中の良友に対してすまないと思うことの数々は、誠に口に出していえないくらいである。世の夫婦の方々に忠告する。夫婦たるものは互いに仇敵のようにいがみあってはならぬは言うまでもないが、さればとってあまり情が深すぎるのもよくない。「恩愛の夫妻は終わりがよくない」と諺^{ことわざ}⁴¹にもある。私ごときは前車の覆轍^{ふくてつ}としてよろしく用心せられるべきである。」(巻三より)特に、情けは人の為ならず、互いに情感の罌^{やいば}に堕ちて出せないことはとてもつらいことではなであろうか、と嘆願する。

しかし、よく考えてみると、芸術がなければ、沈復は非常に面白い人生を歩んでいたかもしれない。面白い魂は、必ず面白いものを見つけ、楽しませてくれる。

「他人の世界で生きることに疲れた男は、愛する人の前世を覚えていることだけを書き留める。」(佐藤・松枝、解説)。

一般に、人生の苦難や思想的な圧力、あるいは性格などによって、人生観に歪みが生じることは誰にでもよくあることである。このような不穏な要素を乗り越えることが、まっとうな人生観の魅力なのだろう。つまり、「人生は夢だ、面白く、楽しく (float and be interesting)」ということである。「人生は夢のようなもので、面白い人になり、楽しく人生を送ろう (浮生若夢, 有趣做人)。」

三 曲散人帰 後二記の散逸と鄧尉梅⁴²の所在

1. 恩愛縁分の始終

長い間、沈復と『浮生六記』の行方や作者の晩年についてはほとんど知られていなかったが、近年、民間の「浮学」研究者の努力により、その全体像が見えてきた。そして、残念なことだが、晩年の沈復に関する情報がかれ本人からは少なく、幸い何人かの友人が書いたものより、少しずつそれはわかってきたことである。

すなわち、沈復は45歳以降、46歳のときに清の使者とともに「司筆硯^{しひつげん}」として琉球に行き、帰ってきて故郷の呉門で二年間ほど過ごし、49歳から60歳までの約十年間、如皋で幕僚として働き、

41 つまり、此处では、沈復が言いたいことは、日本語で「掴まず離せず」というニュアンスのことだろう。

42 鄧尉という地名は、従来高名を保有する。繁華街である蘇州の近郊で、市内中心部から二十キロ余り。現在車でしたら、あつという間に付く場所である。でも、明清時代頃、やはり田舎のままで静かに人々は少ない。現在、別荘風の不動産開発によって、かなりエコ的な場所として知られたが、でも現地に住んでいる人々はやはり、交通の不便などで文句を溢される。康熙帝28年(1689年)、康熙帝は梅の花を見に鄧尉を訪れ、「鄧尉は古来より知られ、梅に早春なり」と詠んだという。それ以来、乾隆帝は6回にわたって南下し、そのたびに鄧艾の梅の花を訪れ、「鄧艾香雪海歌」という6編の詩を詠んでいる。漢の時代の鄧尉のほか、古代に鄧尉を訪れたり住んだりした有名人には、宋の時代の学者、茶心もここで隠棲していた。彼は梅蔭尼寺を建立した。明の高士婦莊も明の滅亡後…鄧尉の周辺には、いくつの山があり、たとえば虎山、龜山、至里山、茅岡山、石帆茶山、馬駕など多くあり、皆梅の花で覆われている。鄧尉は主丘である。東漢の僧、鄧禹がこの地に隠棲し、その廟に檜を植えたとされる。「清く、妙で、古く、怪しい」のことは特徴。

61歳以降、故郷の蘇州に戻り、社会から引退して蘇州に近い場所で「桃源郷」のような場所に住んだのである。このことから、彼は社会から身を引き、蘇州近郊の「桃源郷」と思われる場所で隠遁生活を送り、最後はうまくいったようだが、社会にとっては、彼の消息はどこにもないようなものである。

ここで重要なのは、60歳のときに友人の顧漢が詩で彼を祝福していることで、沈復が隠遁生活に戻る手がかりが残されている。確かなことは、沈復が60歳になった頃（道光二年、1822.11.22）、すでに如皋を離れて故郷の蘇州に帰っていたが、その前後、すでに鄧尉山を最後の隠遁の地として選んでいたことである。それは、無錫の顧翰の詩「長寿の詩」である「寿沈三白布衣」に表れている。詩の最後の数行には、「家で会い、森の花に微笑んでほしい」と書かれている。「揚州の鶴を腰で羨むのではなく、あなたと一緒に鄧尉の梅を毎年見ているのだ」。

言うまでもないが、康發祥も「画（絵）詩」の中で「題沈三伯福携姬婦去図」（道光三年、1823年）ともしっかりと具体的に記述している。さらに貴重なのは、康の詩の前に小さな序文がついていることである。「三白は琉球への外交官で、妾の華萼は銃と剣舞が得意で、旅にはいつも同行していたので、呉門に部屋を建て、そこを終着点とする野心を抱いていた」とある。友人が絵を持って来て詩を募集していたが、会っていないのが残念で、返事を書いた⁴³。

嘉慶十三年（1808）末、琉球旅行を終えた46歳の沈復は、徐々に晩年に入り、自分の人生を見つめ直していたはずである。つまり、琉球への旅は、次の三つを彼に与えたに違いない。

まず、『浮生六記』の誕生、そして、自分の人生を見直し、反省し、意思を新たに、やがて隠遁したことである。

最初の四記の草稿を修正し、装飾しながら、琉球滞在中に異国情緒あふれる琉球の自然や人間環境を直接観察した経験に基づく記録だけでなく、琉球文化の嗜好や長寿の方法に関する考察も構想する必要があった。

そして、それらをすべて足し合わせると、六つのジャーナルという形になる。それとともに、自ずと浮上するのがネーミングの問題である。もちろん、当初は『浮生四記』というタイトルをつけていたのかもしれないが、この時点から『浮生六記』というタイトルを明確にしたのである。おそらく、日本語版の初期の翻訳者の一人である佐藤春夫氏も、このことを認識していたのだろう。「この意味ではさすがに綿々たる亡き愛妻への追慕も稍盡きた形になっていたらうかと想像される巻五巻六あたりの失われているのは必ずしも惜しむに足りないのかもしれない。或はこの事実がその最後の二巻を散佚させてしまったのではなかったらうか。」

そのためか、これまで発見された沈復の晩年の資料には、晩年の伴侶であった華夫人について直接、あるいは明示的に言及はあまりされていなかった。

しかし、限られたデータと情報に基づいて、琉球への渡航が後者2つの記録に与えた影響は次

43 彼の詩はこうだ。君の来訪を期待し、お宅で、森の花の満開を見て笑うのが楽しみだ。湘江の青牡丹花木の杖を献上し、満亭の紫霞の杯で飲んで満喫。揚州の鶴にはうらやましくないが、鄧尉の梅花はあなたと毎年一緒にたのしく見てみよう。ここで、揚州鶴という晋代の典を使い、晋の阮脩は性簡任不修人事。お金があった際、鶴を乗り、揚州にいてパフォーマンスの物語をかり、真楽従来随処在、那須騎鶴到揚州。真楽は従来より随処にあり、なんぞもちいん、鶴に騎りて揚州に到るを。つまり、ほんとうの楽しみはどんなときにも、どんなところにもあるのだ。どうして鶴に乗って揚州に行こうなどと思わねばならんのだね。鄧尉岡山では、梅林であることで古来の名所地になっている。

のように推定される。

以下の詩は、「廟堂」にある中国社会科学院文学研究所の元研究（教授）である陳毓罈の話により、沈復が琉球にて創作したものらしい。沈復のものとして『元和県志』によって記録されたが⁴⁴、2010年以來、違う人のものだった、と論証されている⁴⁵。だけれども、この二つの詩は、確かに、琉球群島に似ている環境に生まれた作品とは間違えないし、内容の映写も琉球本島形勝の地理的要素も類似していることで、此処に特にこの二つの詩の文意を借りて沈復の当時の心境を喩えておきたい。つまり、その詩を借り、沈復の情感を寄付する。

一つ目『望海』詩云：「行到千山欲盡頭，驚看巨浪拍天浮。翠螺遠點群峰曉，鐵馬喧騰萬里秋。亭古三間倚峭壁，堤長一帶束橫流。始知疊嶂重重處，鎖鑰東南第一州。」⁴⁶

二つ目『雨中游山』詩云：「大瀛雲水漫丹邱⁴⁷，海外人來天外遊。寒雨滿城無過雁，荒潭抱壑有潛蚪⁴⁸。招搖北極如橫帶，控制南閩等挈馱。醉倚移情台畔石，蕭蕭落木送殘秋。」

つまり、著者自身が、「海外人來天外遊」のように異境の空を仰ぎ見て、多彩な山川を歩きまわる。「醉倚移情台畔石，蕭蕭落木送殘秋」この二句は、確かに沈復が琉球に滞在した頃の心境と類似するかもしれない、と筆者は想像して思う。つまり、琉球で、ある饗宴のあと、酔っ払い気分で華萼如夫人の処（台畔石⁴⁹）に戻り、此処は、沈復は二重の情感を重ねて、二人の女性へのイメージがだぶって夢のように時空間を回転しているだろう。現実味の華萼により、遙かな揚州に葬られていた芸娘のお墓参りへの愛着感を託していることだろう、と筆者は推察する。ただし、滄淵を渡って琉球という島で、さらに無限の海で海天一際、自分も徐々に年を取り、秋の落葉とともに残秋を送ろう。しかし、この時も後二記、いわゆる第五記、第六記をすでに草稿やメモなどと

44 陳毓罈：『浮生六記』研究 中国社会科学文献出版社 2012年出版 北京 p 15 - 16 参照。が、本文終了に近い頃、民間「浮学」研究者の張一民（ネットネーム冷然劍鋒）より、この二つの詩は、沈復のものではなく、ほかの方のものだった考証文を読んで、啞然であった。具体的な話は、文後に置きたい。

45 『望海』の著者は、秦境という方、『雨中游山』のは、姚燮という方で、二人も鄞県の出身者であり、題名は、『高湾望海』と『雨中游蓬莱山用壁间韵』として民国の『象山県志』に収録されている。陳教授は、実に史大木という人の文章より写したが、説明しなかった。

46 琉球の旅を齊鯤に推薦した石蘊玉が沈復の「琉球観海図」および「望海」の詩に、次のような詩も同調した。“中山瀛海外，使者賦皇華。亦有乘风客，相从貫月楂。蛟宮依佛宇，龙节出天家。万里波涛壮，归来助笔花。”ここは、「万里波涛壮、归来助笔花」を注目したい。特に、後二記のことも含まれて言われているだろう。また、南宋の柳永にも「望海潮」という詩も残っている。「東南形勝，三吳都會，錢塘自古繁華。煙柳畫橋，風簾翠幕，參差十萬人家。雲樹繞堤沙。怒濤卷霜雪，天塹無涯。市列珠璣，戶盈羅綺競豪華。重湖疊嶂清嘉。有三秋桂子，十里荷花。羌管弄晴，菱歌泛夜，嬉嬉釣叟蓮娃。千騎擁高牙。乘醉聽簫鼓，吟賞煙霞。異日圖將好景，歸去鳳池誇。」

47 大瀛とは、ここで大海原、東シナ海や太平洋のことも言う。大陸海岸より大海の向こうがわのことを意味するだろう。丹邱（丘）、神様の居場所、ここでは、琉球は伝説のなか、蓬莱仙島ともいう。

48 潜蚪、水底の蛙類の幼体。全唐詩卷200、岑參の詩「与鄜郡群官泛漢陂」、そのなか、「万顷浸天色，千寻穷地根。舟移城入树，岸阔水浮村。闲鹭惊箫管，潜蚪傍酒樽。暝来呼小吏，列火俨归轩。」白居易も「想东游五十韵」のなか、「精神昂老鶴，娑彩媚潜蚪」もある。

49 台畔石とは、具体的に何を指すか不明だが、特に、美女の住むところだろう。北宋詞人周邦彦の詞《拜星月慢・夜色催更》のなか、「画图中、旧识春风面。谁知道、自到瑶台畔。眷恋雨润云温，苦惊风吹散。念荒寒、寄宿无人馆。重门闭、败壁秋虫叹。怎奈向、一缕相思，隔溪山不断。」いずれに、情事への思いを送ることであろう。「瑶台の畔」は美女の住むほり。《离骚》：「望瑶台之偃蹇兮，见有娥之佚女。」王逸注：「佚，美也。」

して出来上がっていただろう、と考えられる。ここまで推測すると、この詩の著者は、あの使節団のなかの五人の従客の一人の無名士ではなからうか、または、琉球に行った従客との間、何らかの繋がりのあるものか、と筆者は妄想になる気持ちにおちいる。

つぎに、顧翰の詩⁵⁰「寿呉門沈三白」(沈三白誕生日への祝い)によって「昔聞沈東老，家貧樂有余：牀頭千斛酒，架上萬卷書。我觀三白翁，蹤跡母乃是！無必慕榮利，不肯傍朝市。當年曾作海外遊，記隨玉冊封琉球」で三白のその都度の人生の流れを回顧した後、「風濤萬里入吟卷，頓悟身世如浮漚⁵¹。人生得失等毫髮，一意率真非放達。」という風に描いた。なるほど、これらの感悟は、自ら三白より聞かなかつたら、描いてこれなかつただろう。琉球の旅で、「風濤萬里入吟卷」、一人の読書人の彼にとって、時空間的に空前絶後のショックだろう。彼に、琉球の旅はたしかに「海山聞説風能引，也在虛無縹渺間（「冒序」より）」のようなことで、浮生若夢のようなことにふたたびまれるだろう。ただの市井社会で庭山水や商売傾倒などでめちゃくちゃの暮らしより、海天一色な雄大さ、琉球人ののんびり過ごしへの感動的なことなどで、彼の人生観をしっかりと変えてしまっただろう。



50 顧翰は、琉球に来たことがないが、沈復の琉球の旅について、相当の理解があるらしい。その七言の長詩のなか、「當年曾作海外遊、記隨玉冊封琉球、風濤萬里入吟卷、頓悟身世如浮漚、人生得失等毫髮，一意率真非放達」、彼の琉球の旅は、あのような滄海を渡り、周りに何もなく、人のいろいろ、男のいろいろ、水面の漂の浮いている泡のように悟る、すぐに人生の損得は髪の本ぐらいささいなこと、本当に大事なものは、自分のやりたいことへの専念である、と沈復の心境を釈放したらしい、相当な親友ではなくできないだろう、と筆者は推察する。

51 浮漚^{うきなわ}のことで1. 水面に生じる泡。元代無名氏の元曲『村楽堂』第一折：「我將世事都參透，幻身軀似風中秉燭，可憐見便似兀那水上浮漚。」清代文廷式〈鷓鴣天。 比喻生命短暫或世事無常。清。文廷式〈鷓鴣天。萬感中年不自由〉詞：「詩漫興，酒新芻，醉來世事一浮漚。」2. 生命の無常短く又は世間のことの無常を例え。唐の李遠〈題僧院〉詩：「百年如過鳥，萬事盡浮漚。」《西遊記》第一一回：「百歲光陰似水流，一生事業等浮漚。」など。台北：『教育部重編國語辭典修訂本』より。

また、前述した康發祥『小梅山房詩集』の詩は年代順に並べられており、『題沈三伯福携姬婦去図』（「沈三伯が妾を伴って帰ってきた」）という詩の発表年代は、「癸未」年すなわち道光3年（1823年）の頃であることが判明。言い換えれば、その前後、沈復は、また60才後の幾つの年で健在しているそうである。

その後、道光五年（1825）、後世ご存じのように、管貽蓀（字樹荃）⁵²による冠頭詩、『分題沈三白処士〈浮生六記〉』が世に表した。

2. 沈復の隠遁 鄧尉梅とは桃源郷か

帰郷後、「橋邊孺子呼進履，當代大臣來結襪。偶因幣聘來雉皋，十年幕府衣青袍。」最後の十年の幕僚生活を送ってから、とうとう彼の最後の晩年生活に入った。「買山無貲去歸隱，腸繞吳門千百遭。吳閶門，虎阜寺，高道名僧日棲止。朝君結屋相往來，拊掌一笑林花開。贈君以湘江綠筠之杖，醉君以幔亭紫霞之杯；腰纏不羨揚州鶴，歲歲同看鄧尉梅。（この最後の句は、「今後、年々とともに鄧尉山の梅林梅花を觀賞しよう」）⁵³、上述のように顧翰の詩は、実に沈復の一生涯を回顧した上、彼晩年の生活と行方について一つの回答ができていて、と筆者は思う。

だからこそ、それと関連して『浮生六記』の書名はいつ頃にできたかを問題視するべきである。葉徳均佚文「再談沈三白」⁵⁴のなか、次のように指摘した。沈復は、「琉球から帰国後の頃、また嘉慶帝朝の時にあたり、相変わらず生きているそうである。晩年の60歳くらいです。」

最後は、ここで少し遡ってみよう。彼が父の死後、世を捨てて深山に遁れようとして娘や友人に止められたことが巻三に言及されていたが、後にまた芸が忘れがたみの一粒の長子、逢森の夭折を見たことが巻三末節に見えている。「かくてすでに彼は芸娘の幻を追ひながら永遠の生を求めて道に入ったのが巻六の内容ではあるまいかと想像される。」（佐藤春夫「解説」より）、さらに、琉球の旅において、沖縄の人々の生活様式や淡々とのんびりした様子を見て感動したのだろうか？ 不自然ではない、と筆者は思う。

生涯を通じて、寺の高みや世の中の栄華を追い求めることもなく、紙や金に酔いしれることもなく、酒場やレストランで蕩尽することもなかった。彼は、高い地位には興味がなく、特に世俗の争いにはうんざりしていた。世間から戻ってきて、まだ若造である。青春時代に戻りたい

52 ここは、この詩の原著者は、兪平伯の訂正によって「管貽蓀」に改正した。管貽蓀（字樹葵）は管貽蓀の従弟である。前刊文章の注11を参照してください。管貽蓀（1788—1848）、字樹荃、号芝生、江苏阳湖（今常州）人、嘉庆十八年（1813）举人、曾任河南固始县知县、福建兴化知府、工诗词、著有《湘西斋诗草》二卷、《裁物象斋诗钞》等。さらに、管貽蓀はもう一つの身分が明らかになってきた。それは、如皋にある安定書院の院長を務めたことがある。これは、道光『如皋県統誌・学校』にある「院長題名録」の記載でわかる。これをきっかけに沈復のこの如皋の十年（顧翰《寿沈三白布衣》诗中那句“偶因幣聘來雉皋，十年幕府依青袍”、嘉庆十六年（1811）至道光二年（1822）くらい幕僚暮らしのなか、お二人の付き合いが深めて、『浮生六記』の原稿を自ら見させていただいたことがあり、そして詩を題してもらった可能性があったのではないのか、と徐継康という方より「沈復和他画的《水绘园图》」という文章の紹介でわかる。（2021-12-03『文汇报』）、また、管氏は、もう一つの身分は、世の中に知られず、如皋書院の院長を担当したことである。これは道光『如皋県統誌・学校・院長題名録』に記載があり、多分、その際、彼は沈復の『浮生六記』の原稿を読んで題詩をした時はその頃であった、と推測される。

53 葉徳均佚文「再談沈三白」より。

54 葉徳均氏の研究より、上世纪40年代发表的两篇研究《浮生六记》的文章：《沈三白与石琢堂》、《再談沈三白》、《古今》第39期、40期、1944年2月。2005年王人恩、谢志煌「《浮生六记》百年研究述评」のなか、葉氏の研究がみえなかった。

だけなのに、自分の努力とわずかな貯金で、山の中に家を建て、世界の美しいもの（花、水、自然、紅顔（陳芸、華夫人））を見ることができるのである。

沈復は、自分の人生を振りかえってみることで、大変な所感があり、長い間、中国文化の精髓をすべて彼に積み重ねて吸い込んだ後、折り返しに反芻的に浮かび上がってきたらしい。例えば、莊子、王羲之の蘭亭の序、などである。

魏晋南北朝時代の王羲之の『蘭亭序』⁵⁵の文意を見てみよう。

（前略）當其欣於所遇，暫得於己，快然自足，曾不知老之將至；及其所之既倦，情隨事遷，感慨系之矣。向之所欣，俯仰之間，已為陳跡，猶不能不以之興懷。況修短隨化，終期於盡。古人雲：“死生亦大矣。”豈不痛哉！

每覽昔人興感之由，若合一契，未嘗不臨文嗟悼，不能喻之於懷。

固知一死生為虛誕，齊彭殤為妄作。後之視今，亦猶今之視昔。

悲夫！

故列敘時人，錄其所述，雖世殊事異，所以興懷，其致一也。後之覽者，亦將有感於斯文。

ここで幾つかの文意を訳すと、

生き方は様々であり、静と動は同じではないが、それぞれの信ずるところに従い、暫時、自身のアイデンティティが合っていれば、絶好調と心地よく、老いが忍び寄っているのにも気づかない。

ところが、今まで意に叶ってきた事、既に倦怠感が生まれ、情は、別の事に従うようになると、感慨は、その他の事に係わるようになる。過去の栄光は、あっという間に、もう過去のものとなってしまっているのだが、それでもなお、感慨を興さないわけではない。ましてや、人の命に長短あっても、道理に従い、終には尽きてしまうのだから、なおさらである。

古人（莊子）は、生きることと死ぬことは、共に重要だと言った。これは、なんとも痛ましい。昔の人々が生きて感動してきた事を見るたびに、常にどれもが、自分もそうだと思う。なので、莊子の文を読んでいると歎き悼ましき、真から納得することができない。もとより、生死が同一だというのは偽りであり、命の長短が同じというのも妄想である。とはいえ、後世の人たちが今を見るのも、今の我々が昔を見るのと同様なのだろう、悲しいかな。

ゆえに、ここに集まった人たちを列記し、その述べる所を記録しておこう。時代が遷り変わり、

55 「蘭亭序」原文：永和九年，歲在癸醜，暮春之初，會於會稽山陰之蘭亭，修禊事也。

群賢畢至，少長鹹集。此地有崇山峻嶺，茂林修竹；又有清流激湍，映帶左右，引以為流觴曲水，列坐其次。

雖無絲竹管弦之盛，一觴一詠，亦足以暢敘幽情。

是日也，天朗氣清，惠風和暢。仰觀宇宙之大，俯察品類之盛。所以遊目騁懷，足以極視聽之娛，信可樂也。

夫人之相與，俯仰一世，或取諸懷抱，悟（通“晤”）言一室之內；或因寄所託，放浪形骸之外。雖趣（通“取”）舍萬殊，靜躁不同。

意識：永和九年（353）、干支は癸丑にあたる。この春の暮の初め、会稽山陰の蘭亭にて行事を行った。禊を行うためである。名士の方々、ご出席いただき、老いも若きも、皆、お集まりいただいた。この地は高い山に険しい峰、茂った林や長い竹があって、また、清流の早瀬もあり、左右に照り映えている。この水を引いて、杯を流す曲水を造り、各々が順に座った。笛や琴の管弦の賑やかさは無いが、酒を交わし、詩を詠むことは、これまた、奥深い心情を伸びやかに表すに最高である。

この日は、天ほがらかで、気は清く、恵みの風が和らいで吹いている。天を仰いで宇宙の大なるを観、俯しては万物の盛んな様を察する。景観、目に良く、思いを馳せるというのは、視聴の楽しみ極みである。まことに楽しい！それ、人々がお互いに、一生の立ち振る舞いをするや、ある人は、心に多くを抱いて、室内で議論し合い（紙に談兵するもの）、ある人は、好むところに従って、形式にとらわれずに振る舞う。

物事が変化しても、感慨を興す所以は同じなのだから。後の世の人々も、また、この文に感じ入ることであろう。⁵⁶

このような蘭亭叙に要約すると、つまり一人ひとり微小な人生も「生きて感動する喜び」ということかもしれない。この世の詩の題材は、様々有るが、やがて世の中は変わり、消えるものもある。しかし、詩の中に歌われる心の印象は、後世の人にも通じるものがあると信じている。

一人の人生とは、いくら微小な存在でも、如何に侮辱されても、「生きて感動する喜び」を持ちながら、自分によってまとまり、やるべきことをやりつづけ、できないことに安心して、気分や気持ちの余裕をもち、日常暮らしを試みていき、最後に、周りの者に「さようなら、ありがとう」、と言って消えていくことは、わが「浮生」の軌跡にたどりつくだろう。

先賢との違いは、彼にとって、ただの文学的感慨ではなく、事後覚悟でもなく、着実に自分の生活のなか、夫婦のつながり、日常茶飯事のこと、人生の実践（成功と失敗の繰り返し）、審美観の実践などを通して、ただの肉欲的、物欲的ではなく、情感的、精神的な堪能や体感など、時代を超え、追求するべきではないのか。一つの気質、一種の品格と後世の人々をもさらに魅了するところではないか、と筆者は信じるのである。

偶然なことであるかもしれないが、琉球の旅は、確かに彼の思いに多少加味したであろうと、筆者は信じている。それは、後二記の生れたことから、内在的に自己証明ができると思う。

だから、現在に至っても、これは楽しく平和に読める本であり、さらにその粋は「閨房記楽」（結婚の幸せ）の喜びであるとの感想や「沈復の本を読んだことで、平凡な抑圧や肉体の痛みをはるかに超え、この幸せの謎を感じた」という林語堂の話に同感した。

この世界で、私たちは面白い人になり、面白い人や物を発見するよう努めるべきであろう。「人々は無知であることができるが、退屈ではない」と、ある有名な作家は言っている。また、彼がいくつかの真実を理解し、いくつかの興味深いことに遭遇した（出会った）という理由だけで彼が世界に住んでいると言った。（王小波の語を借りて）

実は、面白くてつまらないということも、自己感情に基づいているので、面白くて楽しむことが一番大事である。部外者があなたを面白いと思ったら、はるかに良いであろう。

さて、沈復 63 才（道光五年、1825 年）の後、消息不明のままに隠遁生活に入り、死ぬまで彼が生前憧れた「鄧尉梅」にある桃源郷に暮らしたそうである。もちろん、如夫人の華を連れて去った。それから、沈復本人直接に文字資料や生活情報の闕のままになってしまった。

実に、隠遁の考えは、大人になった沈復の一生を貫いている。

1781 年（乾隆四十六年、19 才）頃も始まってきた。この幕僚生活（実習生期間も含め）の開始の年、「だが私はこれを機に以後幕友の業を習うことになったのである。これは決して愉快的ことではない。それをなぜここに書きつけるかといえば、ほかでもない、これこそ私が学問を捨てて浪遊するようになったそもそもの始まりであるので、これを書きつけた次第である。」

この年の秋、鴻幹とともに重陽節の時、外遊中の寒山への山登りの途中、将来家を建てる（隠居）土地を探す話をした。そのときには芸娘も健在していた（巻四より）。彼は、25 才の頃（1787 年、乾隆五十二年）「績溪行き以来、私は役所のなかで公然と演ぜられている卑しくもさもしい人々の振舞を見るに堪えなくなり、ついに役所勤めから足を洗って商人に鞍えした。」商売の経験が

56 日本語訳は、「蘭亭序」と絵画 全体意識・解説 作者不明。ネットより <http://kininaruart.com/artist/kanbun/ranteijo/ra9.html> https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1330064613 バストアンサー den***** より

始まって、失敗した。ふたたび、幕友生活を再開した。しばらくすると、また南の広州へ商売の道をたどっていく。

妻の死去後、しばらくしてから父がなくなると、沈復は再び隠遁したいと思うようになる。その際、母、娘、息子の忠告を聞いて止めた。その後、母、息子もなくなり、娘も童養媳⁵⁷という形で早めにお嫁さんにした。一連の不幸や惨事に遭遇して、孤独だった沈復は、「ああ、芸にできた一粒種の男の子は、ついにその後を嗣ぐことができなかつたのか。琢堂もこれを聞いて痛嘆し、私に妾を一人贈り、重ねて春夢に入るようにとすすめてくれた。それ以来、私はふたたび喧々囂々たる世俗の塵のなかに埋漏れてしまったわけだが、この夢の醒めるのは、さてまたいつの日のことやら。」(巻三末)

琉球に来てから夢から覚めたのか。

いい日々は夢のようなことなので、大事にしないと後悔しても仕方ない。「浮生若夢^{うきしょうじやくむ}」だから、沈復は、一生をかけ、隠遁暮らしを求めたい。自分の号、梅逸といい、由来は「梅妻鶴子」^{ぼいさいかくし}⁵⁸という物語である。

そうすると、「鄧尉梅」という場所は、彼の隠遁する場所だと思うが、調べてみると、非常に広い地域であることがわかった。要するに、太湖の岸に湖内に引き出した半島のような場所で、鄧尉山^{とういやま}と玄墓山^{げんはかやま}という山脈の周辺のことを言う。特に古今でも梅花の梅林で有名なところである。同じ蘇州出身、明の大家である画家沈周^{ちんしゆう}も、晩年の居はここがいいと、詩を残していた。「山園水抱開農桑、樂土風光真畫裡、三年潢潦我無家、恨不攜書亦居此」。此処は、現在光福鎮という賞梅の名所地として有名だが、史上、特に光福寺で名前の由来だった。歴史は南北朝時代へ遡り、仏教の線香が隆盛した。そして、明清の時代、いつの間にか、冬の際、あちこち満開の梅花で遠近にも名前を知られ今までも続いている。康熙帝、乾隆帝は数回の江南地域に巡視した際、ここに来たし、今でも名看板として援用されている「香雪海」の詩碑には、乾隆帝「鄧尉知名久」の詩碑も残っている。

沈復も、この地を気に入った。彼に親しい友人の文字より情報が得られる。例えば、彼の心境が前述の詩『雨中游蓬萊山用壁間韻山』(姚燮より)のなか、「送殘秋」で晩年の心境を同じようだが、『清代詩文集彙編』に収録された康發祥《小海山房詩集》に《題沈三伯福携姬婦去図》という詩があり、その詩の小序には、“三白佐使琉球，姬人華萼字宛如，善舞銃擊劍，出游必偕，特筑室於吳門，有終焉之志。友人攜圖徵詩，餘惜未謀面，走筆以應、云々。

それにより、

「曾經滄海難為水，塵夢温時不駐春。故黛芸香總消歇，新枝華萼可重芬。翻徵玉筋綢繆共，誰見青衫涕淚頻。五柳園中一宵火，棲鴉無處吊斜暉。詩のなかに注があり、華萼女史は沈三白の姫妾のことである、と指摘していた⁵⁹。三白は44歳ごろ、潼関で姫人である華萼を石蘊玉氏よりいただいた後、道光三年(1823)まで、すでに61歳、康發祥によって「題沈三伯福携姬婦去図」

57 男女側それぞれ伝承的・経済的理由で、幼女をもらって育て、年ごろになって自分の息子の配偶者とする旧中国の風習。

58 梅妻鶴子とは、宋の時代、林逋(林和靖)という人、西湖のほとりに隠遁くらしをして、俗世を離れた清らかで風流な隠遁生活のこと。子供無しで、妻のかわりに梅の木を、子のかわりに鶴を愛でて、妻をめとらず梅を植え、子のかわりに鶴を飼い、船を湖に浮かべて清らかに風雅に暮らしたという典故のことである。

59 前文注53参照、張一民(劍鋒冷然)「新發現記叙沈三白及其姬人華萼の題画詩」の博客文章により、つまり、新婦人とともに琉球に来られたことを、初めて明らかにする。

の際、すでに17年間を過ぎていた。晩年の沈三伯は、如夫人（妾のこと）の華萼に同行させ、「呉門に居を筑し、終焉の意を意味するだろう」、特に、「福携姫帰去」（復が姫を連れて帰隠、偕隠）という誤字や隠語のように表現される。」⁶⁰

どこに「帰去（隠遁）」はしたのか、上記の鄧尉山脈のどこかであろうか、と筆者は推察することになる。この辺は、呉門の範囲で、蘇州元来の自宅にもそんなにほど遠くない。

いずれにせよ（想像してみよう）、夏が緑陰を満喫し、冬春は梅花満開を堪能できる場所、最高の気分だし、まさに桃源郷のように他ならない。実に、巻四「浪遊記快」には、鄧尉梅についてけっこう称賛した記載があった。

沈復本人は、すでに巻四にて、蘇州の人気名所地、例えば、虎丘や獅子林などに対して文句した後、鄧尉山をこういうふうを描いた。

「鄧尉山は一に元墓と名付け、西は太湖を背にし、東は錦峯にたいし、丹い崖といい、翠の閣といい、絵に書いたような眺めである。土地の人々は梅作りを業としており、梅花の盛りの時には数十里見わたす限り積雪のようである。だからこれを香雪海と名づけている。

山の左に柏の古木が四本ある。これを名付けて「清奇古怪」という。「清」というのは一本まっすぐに立ち、翠蓋のように茂っている。「奇」というのは地に臥して「之」の字の形に三曲している。「古」というのは頂が禿げて平たく広がり、半ば朽ちて掌のようである。「怪」というのは全体が螺旋に似て、枝も幹もまた同様である。漢代以前のものだとつたえられている。

嘉慶十年乙丑の正月、揖山の父君の尊郷先生がその弟の介石さんと子姪四人を従えて嶼山にある家祠の春祭に赴かれ、兼ねてご先祖のお墓参りをなされた際、私も招かれて同行させていただいた。

道順でまず靈巖山に行き、虎山橋に出て、費家河より香雪梅に入って梅見をした。嶼山の祠宇はつまり香雪梅の中に隠れていたのである。折から花は満開で、自分の吐く息や唾さえ梅の香りがするのであった。私は介石さんのために『嶼山風木圖』十二冊を画いて贈った。』（「巻四」より）

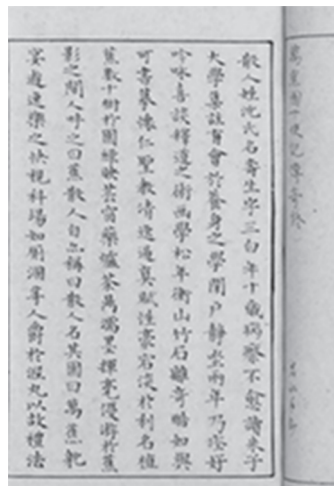
隠遁後の状況は、長い間、五里霧中のままだったが、最近、ある研究者の努力で明らかになったのは、沈復は、又「万蕉園十快記伝奇」の芝居の台本も残している。それは新しい情報になる。「沈

60 劉 劉：清代における冊封琉球の散逸史料：『琉球国記略』（『海国記』か）——沈復『浮生六記』第五記「中山記歴」の元抄本か）（日本語訳付け） 沖縄大学人文学部紀要 第25号（2022年3月発行）p 121—123 p 参照。ただし、前文は、ジュリ（侏儻）のことについて資料不足なので、此处で少し追加しておく。『沖縄大百科事典 中』（沖縄タイムス社 編・刊、1983年）p389より、「ジュリ」の項には、「遊女・娼妓のこと。…近代ではほとんど尾類という字をあてる。発生の歴史は不詳だが、中国との交流が盛んだったころ（14世紀）から存在したといわれ、薩摩侵入（1609）後、貢租の取立てが厳しくなって、農村の貧困家庭の娘が身売りをする例が多くなり、私娼が増えたため、1672（尚貞4）年、摂政・羽地朝秀によって辻・仲島の遊廓がつくられた」とある。『那覇市史 資料編 第2巻中の7』（那覇市企画部市史編集室、那覇市役所、1979年）p18-22 「辻の民俗」 他府県の遊廓にいる娼妓とは異なる沖縄の尾類気質について。つまり、中国の冊封使（張学礼の話で）により、ジュリという発音に日本本土の「傾城（妓女）」という言葉の意味で「侏儻」という漢字をつけくわえたい。その前後、「尾類」という漢字づけがあったかどうか、不明のまま。『沖縄県史 第22巻 各論編10』（沖縄県 編・刊、1974年）p443-455 「遊女（尾類）」の項に、「尾類」という名称の由来と、尾類の制度（契約書など）に関する記述がある、など参照。

沈三白与华宛如_天风上人- 博客 <http://blog.sina.com.cn> > 2016/07/10 アクセス；

沈三白は、44歳の時、如夫人（姫人）の華萼を頂いたとき、すなわち道光三年（1823）の61歳頃より、康熙祥の「題沈三伯福携姫归去图」をもらった際まで、十七年間を経た。晩年の沈三白は、彼女とともに、鄧尉林（理想な珠崖園＝桃源郷）で築を建て、つまり俗世を遠離れの意味を尽くだろう。

子三白，吳下逸士也。博雅好古，繡腹錦心，抱江郎之才，未有伯牙之遇。年十歲病瘵不愈，誦朱子大學集注，有會於養身之學，閉戶靜坐兩年乃痊。好吟咏，喜談釋道之術，画学松年衡山，竹石离奇，酷如与可，書摹懷仁聖教，清逸逼真，賦性豪宕，淡於名利。植蕉數十樹於園，綠映芸窗⁶¹，藥炉茶鼎，濡黑揮毫，優游於蕉影之間，人呼之曰「蕉散人」。⁶²（「万蕉園十快記伝奇」より）
 この養生という話は、ちょっと第六記の話も暗合しているのではないのか？たしか、非常に貴重な史料だと思う。



この資料より、三白は、その「蕉散人」⁶²と自称し、自己紹介で沈姓、氏名は壽生⁶³、字三白との記載がある。これにより、沈復は、隱遁の場で、「鄧尉山」梅林の「香雪海」のあたり、何十本の芭蕉樹を植栽して、萬蕉園といい、自分も「芭蕉散人」とも自称する。ここでは、とくに「緑映芸窗（緑が徐々に芸窓を染めて）」に留意してほしい、「芸」という字は、亡妻陳芸娘の名前と相当の字が出てきたのは、偶然ではないだろう。『六記』巻一に、

「每当竹院に風来の際、月の光は徐々に蕉窓を上がってくる際、単身赴任の私、光景で芸への寂しさ、気持ちりが夢のようになってしまう」、

と描いた場面がある。そして、沈復自分の終老後、如夫人の華萼は生き残って若干年の後、静かにこの世を去っただろう、と思う。ここで少し記したいのは、沈復と華萼如夫人の恩愛関係はいったい如何になったのであろうか、ということである。

61 「緑映芸窗」、筆者は、芸に対するホモフォニックの意味もあると思う。芸窓というのは、古来、書斎の別称、室内に虫駆除の芸香を置くことを言う。特に女性の居場所をも言う。明代朱権『卓文君・第一折』より「静守芸窗，僻居顔巷」もある。此处では、亡妻陳芸への記念や追憶の意味もあるはずである。

62 国語辞典により a. 世事を離れて自由に暮らす、ひまな人；散士、閑人。b. 役に立たない、無能な人。此处は a の意。

63 ここでは、沈復の名を壽生といい、『記事珠』の記載とは、呉門沈梅逸名復と違い。字面上の意味は、長生きではないのか、それは寿生という福があるのか。福は「復」の隠喩であろう。もしかして第六記「養生記道」とのつながりが意味するかも、と推測する。残念なことだが、詳しい年代の記載がなかったらしい。でも、それは道光五年（1825）以後、数年間のことだと間違いないわけである。間違えなければ、沈復の卒年は 70 才前後のことになるだろう。

あとがき

沈復が『浮生六記』で始めた文学的な様式は、中国において伝統的には、いくつかの輪を知恵の輪風に組み合わせると指輪になる、いわゆる「シナロココ」の細工を思わせる。これ等の手法に由らないでこの内容を期したのでは或いは冗漫な愚痴話に終わったかもしれないからである。また彼は喜びと楽しみと悲しみとを心行くままに語り続けながら、その背後に当然あるべき憤や恨みは言外に置いて一言も漏らしていない。作者の人の大きさ床しさとともに中国文学の耽美的享樂的傾向の一面を考えるにも役立つようである。耽美的享樂で繊細巧緻ではありながら、いささかも頹廢的でないのも本篇の長所である。

蒼淵^{そうえん}を渡り、琉球の地まで足を運んで、言葉があまり通じず、商戦充滿な故郷蘇州とまったく異なる雰囲気の中、自らの体感で、琉球の人々と「以心伝心」のように交流し、琉球人のノンビリさや生き方の相違感を自覚したのではないのか？

いままで『浮生六記』の研究は、ただ封建時代への逆反することに限られ、封建時代にはよくある「駆け落ち（私奔）」「情死」や「一目ぼれ」などの様態とは違い、一般に人間にとって固有である「人間性の光」を表すことは、当時の沈復夫妻の言動や意識の影響で評価されていることは、確かに『浮生六記』および主人公夫妻の時代性および価値のみに反映されているとはいえない。封建時代では、儒教的礼法社会にとくに人々の自由を束縛することへの反対や反動、だからその時代に一目ぼれによる男女の情死や駆け落ちなどの内容の文学作品が続出したわけである。思想の自由へのボンデージ (bondage) とは、今までも国によって続けられている国や地域にとって、その代わりに、多数の社会では、精神面の自由を求める時代に、沈復と芸夫妻の精神面にある自由の満ち溢れている恩愛物語は、国境を超え、多国語に翻訳され、異国人の心を揺るがしている。しかし、文学作品としての『浮生六記』は、そうである以上、その生命力、つまり時代を投射するパワー、通時的な人文性・人間性の価値および影響を持つことは、「人世」紛争への離脱、隠遁への憧れるのは、芸と華蓼の死生交替後にも、沈復の心にますます強くなるのではないのか。この『浮生六記』に持たされている、もう一段に時代を越え、人間社会にある普遍的な価値観に反映されているのではないのか。それは世界各国の人々にますます受け入れられていくわけである、と筆者は思う。

二人の夫婦恩愛の夢見心地のような物語は、封建時代の礼制社会への反動や脱出意欲、とくに精神面の脱出や自由へのあこがれ、中国の厳酷な礼法社会の禁固より、ノンビリや穏やかな琉球社会の島民への観察や体験なども、沈復の晩年生活および考えにも多大な影響があるはずだった、と筆者は感じる。そして彼と彼女の恩愛生活は、時代への投射力、浸透、透過率もつように、現代にも変わらずに、現実味生活に相対化される人々の、一つ参照枠として魅了されつつあるだろう、と思う。

前述のように、「人生は夢のようなもので、面白い人になり、楽しく人生を送ろう（浮生若夢、有趣做人）」で、つまり、今日の我々は、沈復のように人生の夢を春夢、いわゆる愛のある夢で、楽しく生涯を生きよう。まさに陽明心学にある「隠逸説」で、その精神的な文脈で、その後、現代中国では、弘一法師より、張伯駒・潘素夫妻、近年の木心まで、繋がりがあるのである。

冒頭に、人は誰しも幸せになりたいと願っているが、どうすれば幸せになれるのか。近年では、幸福論はハーバード大学の講義を始めあちこちによく登壇し花咲く。物質面や金銭的に豊かになれば幸せになれるのであろうか。「幸福度」をめぐる議論は、古くギリシア時代に遡り、活躍し

た先賢たちの議論より、主に哲学の領域でも話題に扱われてきたらしいが、今日の現代社会に暮らしている人々までも探求を続けている。本文の主人公である沈復は、「浮生六記」を通して、当時や後世の我々に「人間開発指数」の一つの記憶をささげ、示唆になるかもしれない。

付記

「みやうどう廟堂」学者である陳毓罍ちんぎよくひ教授は、民間の「浮学」研究者に負けた。沈復の二つの琉球詩に関する問題は、少なくとも陳氏について、三つの問題が指摘される。

1. 文献資料の失察のこと。史大木という方の民国年間の文章《关于沈三白》のなかに紹介された四つの沈復の詩は、もともと間違えたもので、陳氏は知らずにその二つを抜き出して自分の発見として世間に推薦紹介した。そして、史文の中の出典は「元和邑乘」を「元和県志」に変えた。結局、張一民の調査・考証で問題を発見した。つまり、史大木氏の引用は『元和県志』と関係なく、『元和邑乘』より沈復の詩二つを見つけたという間違えだが、陳氏は転用する際、この出所を隠し、さらに、文献名を改ざんした。元著者の題名は、「高湾望海」（秦境）、「雨中游蓬莱山用壁间韵」（姚燮）という風に明記し、琉球とは関係ない。
2. 故意に文献の出典を曖昧にしたこと。陳氏は、この二つの詩を、自分が『元和県志』のなかに発見したが、現存の二種類の『元和県志』には、ぜんぜん掲載されていないし、いい加減な発見だった。
3. 詩の元来の文字を都合で改ざんしたこと。「潜蚪」を「潜蚪」に改ざんした。

事後は、2010年後、すでに張一民、自分の微博にてその問題を考証して公開し、またほかの方にも転載され、2011 - 2012年、再度文章を江蘇省淮陰師範専門学院の学報（紀要）に発表したが、まったく無視されていた（陳毓罍著：『『浮生六記』研究』中国社会科学文献出版社 2012年北京出版）。その後、最後まで訂正の話はしなかった。

また、陳氏が作成した沈復の年表には、沈復がいつ如皋を離れて蘇州に戻ったかについて間違いがある。例えば、63才の沈復はまた如皋にいるらしい、との話など。

つまり、単なる学術的な研究ミスではなく、意図的かつ計算された行為であると判断せざるを得ない。これは、尊厳の問題にもつながる。小さなスケールでの歪みの問題である。しかし、この欠点はカバーしきれない。陳氏はふうがく浮学に多くの貢献をしてきたが、残念ながら民間の浮学研究に対する注目や尊敬がやや不足しており、残念に思っている。

結論で言えば、ただの学術研究上のミスではなく、故意に打算的な行為と見るしかない。これは、品格の問題にもつながる。小さいところで歪んでしまったことで残念なことである。ただし、この秦境と姚燮二人の原著者は、どこかで、沈復たちの琉球従客中の一人より影響を受けてその詩を書いたのかもしれないと、筆者は想像する。

謝辞：

本稿は、先行論考の姉妹篇として、校内ライティングセンターの浜川智久仁氏の協力を得て順調に完成した。その旨、同氏に大変な謝意を表したい。また、今年度を持って小生の教員や教職のキャリア、中国（約20年間）および沖縄大学（約23年間）の一段落に幕を下ろす節目に、学部『紀要』委員の寛容により長文を掲載でき、心より感謝したい。

（おわり）